

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



112

711-56



1200501584915

609

高野山史編纂所編

高野山文書

第六卷

高野山文書刊行會發行



高野山史編纂所編

高野山文書

第六卷

高野山文書刊行會發行



本書の編纂刊行については財團法人啓明會の補助に負ふところ甚大である。茲に謹んで感謝の意を表する。

編纂者

例言

一 高野山文書ハ古義眞言宗總本山金剛峯寺内ニ設置セル高野山史編纂所ニ於テ從來採訪蒐集セル古文書記録中特ニ參考トナルベキ史料ヲ撰ビテ全十二卷トナシ、高野山内各寺院並ニ舊高野寺領内各地ノ文書ヲ家わけトシテ出版セルモノニシテ、豫テ東京帝國大學史料編纂所ノ出版ニナル大日本古文書家わけ第一「高野山文書」全八卷ト并セテ高野山關係諸文書ノ集大成ヲ期セルモノデアアル、

一文書ノ類別ハ主トシテ所藏者ノ分類ニ從ヒ、文書類ノ最初ニ現所藏者ノ名稱ヲ冠ラシメテ其ノ文書名トナシタ、此レハ文書ノ現所藏者ヲ一見明瞭ナラシメ、且ツ後日研究者ガ原本ヲ檢索スルニ便ナラシムルノ意途ニ出デタルモノデアアル、尤モ中ニハ文書ノ内容上特ニ他ノ名稱ヲ附スルヲ以テ便利トナシ、又近ク現所藏者ヨリ他ニ移管サル、モノト目サル、文書類等ガアツテ、前記ノ如ク現所藏者名ヲ冠ラシメテ其ノ文書名トスル

コトガ聊カ妥當ヲ缺クモノト思惟サル、場合ハ特ニ從來使用シ來レル名稱ヲ襲用スルコト、シタ、

一文書配列ノ順序ハ、各所藏者ニ於テ既ニ取纏メテ卷子本トナセルモノハ其ノ順序ニ從ヒ、其ノ他ノモノハ先年來高野山史編纂所ニ於テ探訪整理セシ文書目錄ノ順序ニヨリ、別ニ新タニ編纂シテ分類整理等ヲ加ヘルコトナカラシメタ、

一所收ノ文書中、同文ノモノ、或ハ檢地帳、勘録狀等ノ如ク、略同一内容形式等ヲ有スルモノ多クシテ、此レヲ全部収録スルコトヲ得ザルモノハ、大略其ノ號數、文書名ノミヲ記載シ、或ハ文書ノ首尾ノミヲ記載シテ本文ヲ省略シ、此レニ注記ヲ加フルノ方針ニ出デタ、此レハ文書ノ編纂上最モ妥當ヲ缺クモノトシテ、種々考慮ヲメグラシ、先輩知己ノ意見ヲモ參酌シテ、其ノ卷ニ限リ特ニ總頁數ヲ増加シ、且ツ本文ヲ五號二段組トシテ全文ヲ収録スルノ方針ニ出デタルモ、尙且ツ經費其ノ他ノ事情ニヨリ此レヲ全部収録スルコト不可能ナリシヲ以テ止ムナク此ノ方法ヲ取ルニ到ツタモノ

デアル、サレバ購入者諸彦ニ於テモ編纂者ノ苦衷ヲ察シテ之レヲ諒恕セラレンコトヲ乞フ次第デアル、

一古文書ノ原本ニアラズト雖モ、ソノ當時ノ影寫本、若シクハ當時ヲ去ルコト遠カラザル時代ノ寫シハ姑ク之ヲ原本ト同視シ、唯近代ノ寫シニカ、ルモノニ限リ、特ニ寫シト題シテ之ヲ區別セシメタ、

一文書ノ様式ハ務メテ其ノ原本ニ近カラシコトヲ期シタレドモ、假名消息、尙々書、追而書等原本ノ配列ニ從フコト却ツテ混雜ヲ來スノ虞レアルモノハ便宜此レヲ改メタ、

一花押ハ單ニ(花押)紙背ニアルモノハ(裏花押)草名、略花押、筆ノ軸頭ヲ以テ花押ノ代リニ押シタルモノ等ハ、ソレト(草名)、(略押)、(筆軸印)トナシ、印章ハ□○○等ノ如ク、其ノ輪廓ヲ模シ、此レニ(朱印)黑印ノ種類ヲ傍注シ、又花押印章中、特ニ必要ト認ムルモノニシテ、人名、印文等ノ明瞭ナルモノニハ、之レヲ傍注シ、詳カニセザルモノ、或ハ梵字ヲ書キテ花押ノ代リトナセルモノハ此レヲ模寫シテ木版ニ附シタ、

一 俗字、略字等ニシテ普通ノ字書ニ收メラル、モノ、或ハ密教獨特ノ略字、略符及ビ變體假名等ハ多ク此レヲ正字ニ改メ、異字、宛字、草行等ノ文字モ讀解シ得ルモノハ多ク正字ニ改メ、難解、難讀ノモノハ、或ハ傍注ヲ加ヘ、又ハ原形ヲ模シテ木版ニ附スルコト、シタ、

一 原本ニ塗抹若クハ改竄シタルモノニシテ、原字ノ明瞭ナルモノハ其ノ左傍ニ黒抹ニハ、 ヲ附シ、原字不明ナルモノニハ ヲ填シ、脱字ト思惟サル、モノニハ傍注ヲ加ヘ、磨滅蠹蝕等ニハ字數ヲ推算シテ ヲ填シ、字數ノ算定シ難キ所ニハ 、或ハ 等ヲ填シタ、又原本ノ前闕ニハ ヲ、其ノ後闕ニハ ヲ加ヘテ斷簡ナルコトヲ示シ、朱字ニハ上下ニ「」ヲ加ヘテ右肩ニ*ヲ附シ、朱線ハ……トシ、 等ノ朱筆ニカ、ルモノハ……等ヲ以テ之レヲ表ハシタ、

一 本文ニ附屬セル部分ニハ上下ニ「」ヲ加ヘ、其ノ位置ニ從ツテ(表紙)(外題)(端書)(裏書)(端裏書)(奥書)(奥裏書)(禮紙書)(折封ウハ書)(切封ウハ書)(糊封ウハ書)

(檢封ウハ書)等ト傍注シ、書風ヲ異ニセルモノハ(追筆)(異筆)ナルコトヲ傍注シ封目ハ「」ヲ以テ之ヲ示シタ、

一 原文書ニ附屬セル文書、記録、并ニ包紙、押紙、附箋等ハ原本ニ參考トナルモノ、外ハ多ク此レヲ省略シ、包紙ハ「」押紙、附箋ハ「」ヲ以テ文字ヲ圍ミ、此レニ傍注ヲ加ヘ、又編纂者ノ記入ニカ、ル注記ハ悉テ上下ニ()ヲ施シ、按文ニハ首ニ○ヲ附スルコト、シタ、

一 用紙ノ紙質、或ハ其ノ形式ハ最初之レヲ一々注記スル豫定ナリシモ、文書ノ内容及ビ其ノ性質ニ依ツテ大略推測シ得ルモノ多ケレバ、今ハ之ヲ省略シタ、

一 鼈頭ニハ地名、人名、本文中ノ事實並ニ用語等注意スベキモノヲ標出シテ讀者檢索ノ便ニ供シタレドモ、固ヨリ記事ノ内容ヲ盡スコトヲ得ズ、研究ノ方面ニヨリテハ遺漏多カルベク、又其ノ他編纂上ニ粗漏不注意等遺憾ノ點多カラシカ、幸ニ諒恕アツテ直接編纂者ニ御教示ヲ賜ラバ、後日正誤表ヲ作製ノ時訂正シテ完璧ヲ期スル様充分努力スル考ヘデアル、

例言

六

一本文書全十二卷完了ノ上ハ、東京帝國大學史料編纂所ニ於テ刊行セラレタル大日本古文書家わけ第二「高野山文書」全八卷ヲモ并セテ詳細ナル索引ヲ作り、之レニ主要文書ノ解説ヲ施シテ單行本トシテ刊行スル豫定トナツテキル、

高野山文書刊行會

編纂代表者 中 田 法 壽

高野山文書 家わけ第六

舊學侶方一派文書 目次

例

言

一六

〔寫眞圖版〕

- 一 後村上天皇綸旨 (第二七號文書參照)
- 二 島津家久書狀 (第一一一號文書參照)
- 三 金剛峯寺集會衆連署事書 (第三三六號文書參照)

〔五坊寂靜院文書第一〕

- 一 承久三年八月日 讚岐國司廳宣……………一
- 二 安貞二年三月十一日 鎌倉將軍家下文案……………二
- 三 天福二年四月廿一日 多度庄所當米證文……………二
- 四 延應元年二月八日 太政官牒……………三

目次 舊學侶方一派文書

一

五	延應元年二月八日	官宣旨	五
六	文永六年三月 日	阿闍梨延慶請文	七
七	(年未詳)五月十日	夜部庄百姓等申狀案	九
八	延仁元年八月十八日	澁谷道智請文	一〇
九	永仁元年八月十九日	有賀充念請文	一一
一〇	永仁元年十一月廿九日	多田院政所代圓勝請文	一二
一一	永仁三年四月十七日	多田院政所代沙彌道教請文	一三
一二	永仁四年五月一日	多田院政所代道教請文	一三
一三	永仁四年十一月二日	仲村庄寂靜院方百姓等言上狀	一三
一四	德治二年七月 日	興福寺西金堂衆重陳狀	一四
一五	(年未詳)八月六日	權寺主澄寬書狀	一六
一六	建武三年十一月廿二日	足利直義御教書	一七
一七	觀應二年正月廿二日	沙彌某奉書	一七
一八	明德二年十月十六日	足利義滿御教書	一八
一九	(年未詳)四月五日	權大僧都秀海奉書	一八
二〇	享保十年八月二十二日	六條中納言有藤書狀	一九

二二	享保十年八月廿八日	有雅書狀	二〇
二二	享保十年八月廿一日	桑原中納言長義書狀	二二

〔五坊寂靜院文書第二〕

二三	(延元二年)三月廿六日	後醍醐天皇綸旨	二三
二四	(延元二年)三月廿六日	後醍醐天皇綸旨	二三
二五	(年未詳)五月三日	後醍醐天皇綸旨	二三
二六	延元三年二月十五日	後醍醐天皇綸旨	二三
二七	正平三年二月廿五日	後村上天皇綸旨	二三
二八	正平三年二月廿五日	後村上天皇綸旨	二四
二九	正平六年正月廿九日	後村上天皇綸旨	二四
三〇	正平六年正月廿九日	後村上天皇綸旨	二四
三一	正平十五年二月五日	後村上天皇綸旨	二五
三二	(年未詳)八月廿一日	後村上天皇綸旨	二五
三三	文明七年五月六日	後土御門天皇綸旨	二六

三四 文龜三年八月十二日 御柏原天皇綸旨……………二六
三五 文龜二年九月十日 後柏原天皇綸旨案……………二七

〔五坊寂靜院文書第三〕

三六 (文龜二年カ)九月三日 吉田兼俱書狀……………二七
三七 (年未詳)卯月七日 土井大炊頭利勝書狀……………二八
三八 (年未詳)卯月十一日 土井大炊頭利勝書狀……………二九
三九 (年未詳)五月廿一日 權大納言某書狀……………三〇
四〇 (年月未詳)廿一日 權大納言某書狀……………三一
四一 (年 月 日 未 詳) 權大納言某書狀……………三二
四二 (年 月 日 未 詳) 權大納言某書狀……………三三
四三 (年未詳)十二月十四日 權大納言某書狀……………三四
四四 (年未詳)三月十五日 權中納言某書狀……………三五
四五 (年 月 日 未 詳) 權中納言某書狀……………三六
四六 (年 月 日 未 詳) 進上目錄……………三九

四七 (年 月 日 未 詳) 御引出物目錄……………四〇
四八 寬永十六年霜月吉日 兩界曼茶羅裏書……………四一
四九 (年 月 日 未 詳) 御馳走奉加帳……………四二
五〇 (年未詳)卯月十日 松平信綱書狀……………四三
五一 (年 月 日 未 詳) 兵部卿某書狀……………四七
五二 (年 月 日 未 詳) ミわら書狀……………四八
五三 (年月未詳)廿七日 老女ふく書狀……………四九
五四 (年未詳)六月十一日 見松院惠吟書狀……………五〇

〔五坊寂靜院文書第四〕

五五 嘉祿三年七月十七日 千阿彌陀佛施入狀……………五一
五六 正和五年二月三日 成法坊舍賣券……………五二
五七 延元參年舊七月十六日 成真田地賣券……………五三
五八 正平十年三月十六日 菊圓坊舍田地等讓狀……………五四
五九 明德(四)年六月一日 万喜坊舍讓狀……………五五

六〇	應永廿三年十月廿八日	信宗房田地讓狀	五
六一	應永廿七年三月六日	行長法師去狀	五
六二	寬正四年三月七日	大塔貝吹承仕職補任狀	五
六三	寬正(四)年九月十日	大塔承仕職補任狀	五
六四	文明七年六月廿七日	澁河鏡種寄進狀	五
六五	文明十六年六月廿一日	金光院鎮座等連署山林寄進狀寫	五
六六	永正拾(四)年三月廿八日	增進上人法華經板木置文	五
六七	大永二年四月一日	增進上人等連署法華經板木掟書	六〇

〔五坊寂靜院文書第五〕

六八	寬永元年九月九日	高野山御幸勸文	六一
六九	(年)月日未詳	寂靜院坊號由來	六一
七〇	(年)月日未詳	弘惠和尚檢校帳	六三
七一	(年)月日未詳	寂靜院文書目錄	六四

〔親王院文書〕

七二	永祿四年卯月十六日	成就院乘鏡屋敷賣券	六五
七三	永祿四年卯月十六日	本中院藏本坊舍屋敷賣券	六六
七四	永祿十年八月十六日	遍照院坊舍屋敷賣券	六七
七五	慶長六年八月十五日	遍照院坊舍賣券	六八
七六	慶長十一年五月二日	新介重時坊舍寄進狀	六八
七七	慶長拾七年拾一月十日	知足院惠遍坊舍賣券	六九
七八	元和五年十二月十五日	愛染院良祐置文	七〇
七九	寬永十三年十月吉日	愛染院良祐遺狀	七一

〔寶城院文書第一〕

八〇	應永卅一年三月廿一日	僧澄鋌堂敷地寄進狀	七四
八一	文明十五年三月廿一日	前大僧正長任讓狀寫	七五
八二	文龜三年二月十二日	彌勒院隆算敷地讓狀寫	七五
八三	大永三年六月廿一日	法印良清遣狀寫	七六
八四	天文十六年潤七月七日	深堯房遣狀寫	七七

八五	天正八年十月廿六日	式部公檀那職賣券	七
八六	文祿二年六月七日	前檢校快慶遺狀寫	七
八七	文祿五年六月廿八日	金剛院有仙坊舍讓狀	七
八八	慶長七年八月七日	彌勒院正運坊跡讓狀	七
八九	慶長七年八月十四日	寶山院隆仙坊舍讓狀	八
九〇	慶長十七年三月五日	寶山院隆圓坊舍屋敷請借狀	八
九一	慶長十九年九月十日	寶山院玄永坊舍買券	八
九二	元和九年六月朔日	寶山院快玄坊舍屋敷請借狀	八
九三	元和拾年二月十四日	寶山院長算請狀	八

〔寶城院文書第二〕

九四	慶長十五年正月十一日	堯盛房覺雄請狀案	八
九五	慶長拾五年三月廿一日	無量壽院行昌置文案	八
九六	元和四年十二月廿四日	阿闍梨長海印信	八
九七	元和四年十二月廿四日	阿闍梨長海印信	八

九八	元和四年十二月廿四日	阿闍梨長海印信	八
九九	寬永五年七月十六日	無量壽院覺雄門主職讓狀	八
一〇〇	寬永十二年二月十三日	無量壽院覺雄門主職讓狀	九
一〇一	寬永十二年二月十五日	無量壽院覺雄印信	九
一〇二	寬永拾貳年五月十七日	無量壽院覺雄遺物處分覺書	九
一〇三	貞應二年七月廿二日	古今和歌集紹巴奧書	九
一〇四	天正十八年孟冬中旬	拾遺和歌集紹巴奧書	九
一〇五	天正十八年初冬中旬	新古今和歌集紹巴奧書	一〇
一〇六	天正十八年初冬中旬	後拾遺和歌集紹巴奧書	一〇
一〇七	天正十八年初冬中旬	後撰和歌集紹巴奧書	一〇
一〇八	天正十八年孟冬中旬	金葉和歌集紹巴奧書	一〇
一〇九	天正十八年初冬中旬	千載和歌集紹巴奧書	一〇
一一〇	天正十八年初冬中旬	詞華和歌集紹巴奧書	一一
一一一	(慶長十二年) 菊月廿四日	島津家久書狀	一一
一一二	慶長十三年十月初四日	島津義弘・同家久連置蓮金院修復記	一四
一一三	慶長十四年七月九日	寶性院政遍書狀案	一五

一二四 (慶長十四年カ) 二月廿日 島津義弘書狀 一〇七

一二五 (年未詳) 三月廿五日 島津家久書狀 一〇八

一二六 (年未詳) 七月廿五日 島津義弘・同家久連署書狀 一〇八

一二七 (元和元年カ) 九月朔日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀 一〇九

一二八 (元和元年) 月未詳 廿八日 島津久元外三名連署宿坊證文 一一〇

一二九 (寬永十六年カ) 卯月廿日 島津氏分國中廻文寫 一一三

一二〇 元祿十五龍集卯月十四日 大乘院覺雲五指量愛染王修復記 一一三

一二一 享保七年七月廿八日 島津久貫外四名連署狀 一二四

〔理性院文書〕 理性院所藏

一一三 (年 月 日 未 詳) 龜井家由來 一一六

〔高室院文書第一〕

一一三 (年 月 日 未 詳) 北條長氏書狀 一一七

一二四 (年 月 日 未 詳) 北條氏政書狀 一二六

一二五 (年 月 日 未 詳) 北條氏舜書狀 一二六

一二六 (年未詳) 卯月廿二日 大藤政信書狀 一二六

一二七 (年未詳) 極月 六日 大藤千松書狀 一二九

一二八 (年未詳) 三月十九日 小笠原康廣書狀 一三〇

一二九 (年未詳) 霜月十五日 澤員盛書狀 一三一

一三〇 (年未詳) 八月朔日 北條氏郡書狀 一三一

一三一 (年未詳) 二月廿四日 北條氏規書狀 一三一

一三二 (年未詳) 九月廿七日 北條氏規書狀 一三三

一三三 (年未詳) 極月廿四日 北條氏盛書狀 一三四

一三四 (年未詳) 八月廿二日 石原安定書狀 一三四

一三五 (年未詳) 七月廿五日 澤房滿書狀 一三五

一三六 (年未詳) 正月廿一日 石原安定書狀 一三六

一三七 (年未詳) 正月十六日 松田與左書狀 一三七

一三八 (年未詳) 六月廿七日 北條氏正書狀 一三八

一三九 (年未詳) 卯月廿三日 北條氏治書狀 一三九

一四〇 (年未詳) 卯月廿五日 北條氏治書狀 一三九

一四一 (年未詳) 十月朔日 蘆川景盛書狀 一四〇

一四二	(年未詳) 閏三月十三日	蘆川景盛書狀	一四〇
一四三	(年未詳) 二月廿一日	山角直繁書狀	一四二
一四四	(年未詳) 正月廿六日	峯谷政守書狀	一四二
一四五	(天正八年) 卯月廿七日	蘆川綱盛書狀	一四三
一四六	(天正十七年) 十月九日	蜂屋隆長・同近勝連署書狀	一四四
一四七	(年未詳) 三月廿八日	信治書狀	一四五
一四八	(年未詳) 十一月三日	圓齋書狀	一四五
一四九	(慶安二年) 十一月廿日	吉野直次書狀	一四七
一五〇	(年未詳) 十月廿八日	北條氏宗書狀	一四九
一五一	(年未詳) 後十月廿八日	金地院崇傳書狀案	一四九
一五二	(天正十八年) 極月十六日	山角直繁書狀	一五〇
一五三	(天正十九年) 八月廿四日	山角直繁書狀	一五一
一五四	(天正十九年) 十二月廿七日	山角直繁書狀	一五二
一五五	(年未詳) 無神月十九日	山崎喜右衛門尉書狀	一五三
一五六	(天正十九年) 七月十六日	北條氏直書狀	一五四
一五七	(天正十九年) 七月廿一日	北條氏直書狀	一五五

一五八	(天正十九年) 十一月廿五日	山角直繁書狀	一五五
一五九	(年未詳) 九月十七日	北條直定書狀	一五五
一六〇	(天正十一年) 七月十三日	北條氏朱印狀	一五七
一六一	(年未詳) 五月廿七日	岡本長秀書狀	一五七
一六二	(年未詳) 三月廿四日	石原新兵手形	一五八
一六三	文祿五年二月廿九日	相模七箇寺門徒中連署請文	一五九
一六四	文祿五年三月拾一日	寶金剛寺惠雄請文	一六〇
一六五	(年未詳) 卯月廿五日	南條昌治書狀	一六一
一六六	(天正十九年) 五月十一日	松田直憲書狀	一六二
一六七	(天正十九年) 七月十八日	松田直憲書狀	一六二
一六八	(天正十九年) 九月七日	釣庵宗仙書狀	一六三
一六九	(年未詳) 十一月二日	辻真傳寄進狀	一六四
一七〇	(天正二年) 二月廿日	玉瀧坊乘與請文	一六五
一七一	文祿四年十月十一日	玉瀧坊乘盛請文	一六六
一七二	文祿四年十月七日	相模先達衆連署請文	一六七
一七三	文祿四年十月七日	相模修驗中連署請文	一六九

一七四 慶安二年十二月日 高室院返答書案……………10p

一七五 文祿貳年霜月廿六日 金剛峯寺學侶集會評定事書……………一七四

〔高室院文書第二〕

一七六 (年 月 日 未詳) 金剛峯寺年中行事……………一七

〔蓮上院文書〕高室院所藏

一七七 (年未詳) 六月十六日 豐臣秀吉朱印狀……………一九二

一七八 天正十九年十月廿一日 豐臣秀吉朱印寺領方目錄……………一九一

〔持明院文書〕

一七九 (年 月 日 未詳) 武田晴信勸進狀……………一四

一八〇 (年未詳) 三月十三日 武田晴信書狀寫……………一九五

一八一 (年未詳) 六月十一日 武田晴信書狀寫……………一九六

一八二 永祿二年七月 日 武田信玄晴信禁制……………一九六

一八三 (年未詳) 三月五日 武田勝賴宿坊證文寫……………一九七

一八四 (年未詳) 五月十二日 武田勝賴書狀寫……………一九

一八五 (年未詳) 八月五日 武田勝賴書狀寫……………一九

一八六 (年未詳) 五月十一日 武田信繁書狀寫……………一九

一八七 (年未詳) 三月十二日 武田信綱書狀寫……………二〇〇

一八八 (年未詳) 七月五日 武田信綱書狀寫……………二〇〇

一八九 (年未詳) 卯月廿七日 武田義信書狀寫……………二〇一

一九〇 (年未詳) 三月六日 土屋昌恒添狀……………二〇一

一九一 (年 月 日 未詳) 土屋昌恒添狀寫……………二〇二

一九二 (年未詳) 十月廿八日 土屋昌恒書狀……………二〇二

一九三 (年未詳) 八月十日 土屋昌恒書狀……………二〇三

一九四 (年未詳) 九月廿七日 櫻井信忠書狀……………二〇四

一九五 (年未詳) 八月十五日 跡部品忠書狀……………二〇五

一九六 (年未詳) 三月十九日 福光園寺實惠書狀……………二〇五

一九七 (年未詳) 三月廿八日 福光園寺實惠書狀……………二〇七

一九八 (年未詳) 霜月十二日 福光園寺實惠書狀……………二〇七

一九九 (年未詳) 極月十六日 金剛峯寺惣分沙汰所勢譽書狀……………二〇八

二〇〇 (天正十年)卯月十五日 慈眼寺尊長書狀……………二〇九

二〇一 (年未詳)卯月十五日 慈眼寺尊長武田勝頼廻向道具并金子注文……………二一〇

二〇二 (年 月 日 未詳) 武田勝頼遺物目錄……………二二三

二〇三 (年未詳)八月五日 淺井久政書狀……………二二三

二〇四 (年未詳)五月廿四日 淺井久政書狀……………二二四

二〇五 (年未詳)五月廿二日 淺井久政書狀……………二二五

二〇六 (年未詳)六月二日 由良國繁書狀……………二二六

二〇七 (年未詳)十月廿九日 知久頼龍書狀……………二二七

二〇八 (年未詳)霜月朔日 文永寺宗然書狀……………二二九

二〇九 (年未詳)二月廿一日 鷹野德繁書狀……………二三〇

二一〇 (年未詳)五月十六日 三吉隆亮書狀……………二三一

二一一 (年未詳)六月五日 三吉隆亮書狀……………二三三

二一二 (年未詳)五月廿八日 三吉廣高書狀……………二三三

二二三 (年未詳)五月廿八日 三吉廣高書狀……………二三四

二二四 (慶長五年)九月十五日 京極高次書狀……………二三四

二二五 (年未詳)九月十五日 安養寺氏種添狀……………二三五

二二六 (年未詳)九月十五日 養源院成伯添狀……………二二六

二二七 慶長五年九月十九日 京極高次寄進狀……………二二七

二二八 慶長五年九月十九日 京極高次寄進狀……………二二八

二二九 慶長五年九月廿一日 安養寺氏種寄進狀……………二二九

二三〇 慶長五年九月廿四日 京極高次寄進狀……………二二九

二三一 慶長五年九月廿四日 京極高次家中連署宿坊證文……………二三〇

二三二 慶長五年九月廿四日 黒田伊豫守入道寄進狀……………二二七

二二三 (年未詳)十一月十六日 京極高次書狀……………二二八

二三四 (年未詳)極月十七日 京極忠高書狀……………二二九

二三五 (年未詳)六月九日 京極忠高書狀……………二四〇

二三六 (年未詳)十一月六日 京極忠高書狀……………二四〇

二三七 享保二年八月廿六日 京極高澄寄進狀……………二四一

二三八 (年未詳)九月九日 佛法寺尊朝書狀……………二四二

二三九 (年未詳)六月廿八日 某寄進目錄……………二四二

二四〇 七年正月八日 永隆寺修正莊嚴具注文……………二四三

〔清淨心院文書第一〕

二三一	(年未詳)七月廿四日	長尾景虎書狀	二四四
二三二	(天正七年)二月十四日	上杉景勝書狀	二四五
二三三	(年未詳)十一月廿二日	上杉景勝書狀	二四六
二三四	(年未詳)十月十八日	上杉景勝書狀	二四六
二三五	(天正七年 ^カ)十月十六日	上杉景勝書狀	二四七
二三六	(年未詳)十月十五日	上杉景勝書狀	二四八
二三七	(年未詳)七月廿五日	上杉景勝書狀	二四八
二三八	(年未詳)二月廿五日	上杉定勝書狀	二四九
二三九	(寬永十二年 ^カ)二月廿五日	上杉定勝書狀	二四九
二四〇	(年未詳)八月廿九日	上杉綱勝書狀	二五〇
二四一	(年未詳)神無月十一日	長尾宗心書狀	二五一
二四二	(年未詳)六月七日	長尾清忠書狀	二五一
二四三	(年未詳)卯月廿五日	長尾忠清書狀	二五二
二四四	(年未詳)五月晦日	長尾輝景書狀	二五三

二四五	(年未詳)五月六日	長尾顯長書狀	二五四
二四六	(年未詳)卯月廿七日	長尾顯長書狀	二五五
二四七	(年未詳)六月廿七日	長尾顯長書狀	二五五
二四八	(年未詳)二月十四日	中條景泰添狀	二五六
二四九	(年未詳)五月朔日	長尾熊太郎丸書狀	二五七
二五〇	(年未詳)三月十九日	下條昌親書狀	二五八
二五一	(天正七年)卯月廿五日	飯田長家書狀	二五九
二五二	(年未詳)二月廿日	本庄繁長書狀	二六〇
二五三	(年未詳)六月廿三日	山條長昌書狀	二六〇

〔清淨心院文書第二〕

二五四	(年未詳)十一月廿五日	佐竹義重書狀	二六一
二五五	(年未詳)拾月廿五日	佐竹義重書狀	二六二
二五六	(慶長十七年)五月十六日	佐竹義宣書狀	二六二
二五七	(年未詳)十月廿七日	佐竹義宣書狀	二六三

二五八	(年未詳) 霜月十九日	佐竹義宣書狀	二六四
二五九	(年未詳) 極月廿日	佐竹義宣書狀	二六五
二六〇	(文祿元年) 三月二日	佐竹義宣書狀	二六五
二六一	(年未詳) 十一月廿三日	佐竹義宣書狀	二六六
二六二	(年未詳) 正月一日	佐竹義宣書狀	二六七
二六三	(年未詳) 九月九日	佐竹義宣書狀	二六七
二六四	(年未詳) 六月十二日	佐竹義宣書狀	二六八
二六五	(寬永十年) 四月廿八日	佐竹義隆書狀	二六九
二六六	(寬永十六年) 霜月廿九日	佐竹義隆書狀	二七〇
二六七	(年未詳) 十月廿二日	佐竹義隆書狀	二七〇
二六八	(年未詳) 六月十四日	佐竹義處書狀	二七一
二六九	(年未詳) 九月廿一日	佐竹義處書狀	二七二
二七〇	(年未詳) 四月八日	佐竹義處書狀	二七三
二七一	(年未詳) 三月十九日	佐竹義處書狀	二七三
二七二	(年未詳) 文月九日	戶村義和書狀	二七四
二七三	(年未詳) 六月十九日	梶原政景書狀	二七四

〔清淨心院文書第三〕

二七四	(年未詳) 三月六日	佐竹又七書狀	二七五
二七五	(年未詳) 極月五日	小野崎通宗書狀	二七六
二七六	(文祿元年) 三月四日	梶原政景書狀	二七七
二七七	(年未詳) 二月二日	梶原政景書狀	二七七
二七八	(年未詳) 卯月廿日	德雪齋周長書狀	二七八

〔清淨心院文書第四〕

二七九	(天正十二年) 七月一日	德川家康書狀	二七九
二八〇	(天正十二年) 七月十四日	松下一定添狀	二八〇
二八一	(年未詳) 十二月九日	德川家康書狀	二八一
二八二	(年未詳) 三月十九日	契冲阿闍梨自筆書狀	二八一

二八三	(年未詳) 三月十三日	太田道譽書狀	二八四
二八四	(年未詳) 四月五日	太田道譽書狀	二八五

二八五 (年未詳) 三月廿六日	太田道譽書狀	二八五
二八六 (天正十七年) 卯月廿日	太田道譽書狀	二八六
二八七 天正十九年正月六日	太田道譽日牌料送狀	二八七
二八八 (年未詳) 四月十九日	太田道譽書狀	二八七
二八九 (年未詳) 正月廿六日	太田景資書狀	二八八
二九〇 (年未詳) 二月晦日	太田景資書狀	二八九

〔清淨心院文書第五〕

二九一 慶長十二年十一月廿八日	結城家系圖	二九〇
-----------------	-------	-----

〔智莊嚴院文書〕清淨心院所藏

二九二 (文祿元年) 七月廿四日	加藤清正書狀	二九三
------------------	--------	-----

〔華王院文書〕增福院所藏

二九三 正平六年三月廿九日	後村上天皇綸旨	二九五
二九四 元亨三年十一月八日	藤原宗連寄進狀	二九五

二九五 (年未詳) 二月廿六日	權大僧都法觀奉書案	二九六
二九六 (年未詳) 二月十五日	覺海法橋書狀案	二九六

〔西南院文書第一〕

二九七 (建久八年) 六月八日	關白家御教書	二九七
二九八 嘉禎元年十二月卅日	太政官牒	二九八
二九九 仁治四年正月廿七日	關白家御教書	二九九
三〇〇 (年未詳) 八月七日	則任書狀	三〇〇
三〇一 弘安十一年四月廿八日	關白家御教書	三〇〇
三〇二 (年未詳) 二月廿七日	關白家御教書	三〇一
三〇三 (年未詳) 二月五日	平等心院賢性舉狀案	三〇一
三〇四 (年未詳) 七月十一日	宜秋門院令旨	三〇一
三〇五 (年未詳) 三月三日	關白家御教書	三〇一
三〇六 (年未詳) 十一月十七日	關白家御教書	三〇四
三〇七 (弘安十一年) 四月廿二日	則任書狀	三〇四

三〇八	「正應元」十二月十八日	則任書狀	三〇五
三〇九	「乾元二」三月十九日	內大臣家御教書	三〇五
三一〇	(年未詳)十月四日	則任書狀	三〇六
三一〇	(年未詳)十月十日	重通添狀	三〇七
三一〇	(年未詳)五月十一日	成真書狀	三〇七
三一三	(年未詳)十月十二日	則任書狀	三〇八
三一四	(年 月 日 未詳)	大泉庄相傳系圖	三〇八
三一五	「元亨二」八月九日	日野資明請文	三〇九
三一六	(年未詳)十二月一日	前攝政家御教書	三一〇
三一七	(年未詳)十二月廿三日	前攝政家御教書	三一〇
三一八	(年未詳)三月廿日	關白家御教書	三一〇
三一八	(年未詳)十一月四日	關白家御教書	三一〇
三二〇	元亨二年八月十五日	大泉莊領家日野資明施行狀	三二一
三二一	(元亨二年 ^カ)九月十八日	大泉莊領家日野資明施行狀	三二二
三二二	(年未詳)十一月十三日	關白家御教書	三二二
三二二	(年未詳)十一月十三日	關白家御教書	三二二
三二三	(年未詳)十一月廿六日	關白家御教書	三二三

三二四	(年未詳)十一月廿七日	日野資明施行狀	三二四
三二五	「元亨二」八月十五日	大泉莊預所左衛門尉長藤請文	三二五
三二六	(年未詳)八月廿三日	日野資明添狀案	三二五
三二七	「元亨二年」八月廿二日	關白家御教書	三二六
三二八	(年未詳)八月廿三日	大泉莊領家日野資明施行狀	三二七
三二九	嘉曆元年八月廿一日	大泉莊領家日野資明施行狀	三二七
三三〇	(嘉曆元)九月七日	左衛門尉宗連奉書	三二八
三三一	永和三年十二月九日	和泉國司國宣	三二八

〔西南院文書第二〕

三三二	慶長十七年八月十三日	寶塔院勢算銀子借用證文	三三九
三三三	天正十七年 月 日	宣宥寶塔院合力證文案	三三〇
三三四	慶長十七年九月廿四日	寶塔院勢算金子借用證文	三三一
三三五	元和貳年十二月廿七日	森勝政寶塔院檀那職賣券	三三三

〔西南院文書第三〕

三三六 慶長十五年正月十一日 金剛峯寺集會衆連署事書……………三三三

三三七 慶長十九年四月十五日 徳川氏傳馬手形……………三五

舊學侶方の略史と其の文書……………三七

目次終

高野山文書 家わけ第六

舊學侶方一派文書

〔五坊寂靜院文書第一〕 親王院所藏

一 讚岐國司廳宣

廳宣 留守所

可令早以中村郷、限永代、爲高野一心院御領事、
右以彼村、限永代、可爲一心院御領之狀、所宣如件、在廳官人宜承知、
不可違失、以宣、

承久三年八月 日

大介藤原朝臣(花押)

舊學侶方一派文書



二 鎌倉將軍家下文案

下 大和國夜部庄住人、

可早以當庄所當、相宛高野山五室內寂靜院、并丈六堂佛聖燈油人供事、
右任高野法印坊令申請給、無違亂可宛定之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

安貞二年三月十一日

夜部庄住人

寂靜院并丈六堂佛聖燈油人供

北條泰時

同時房

(北條泰時) 武藏守平 在判

(北條時房) 相模守平 在判

三 多度庄所當米請文

(端裏書) 多度庄所當事 大進法印請文

讚岐國多度庄

高野山寂靜院寺用内、讚岐國多度庄所當米事、
右當庄所當米領家御分内高野山定百石、每年可沙汰進當山之由、聖靈

御在生之時令言上畢、仍無懈怠可致沙汰之由、年々雖加下知、地頭張
行之間、庄家不合期、仍如本數雖不令進、以彼百石、可配寂靜院寺用
之由、被書載御讓狀畢、然者、於百石員數者、不可闕減、但如前々、
庄家不合期、而不足出來者、以便宜之所、所當於百石者致其沙汰、不
可闕乏之狀如件、

二月廿五日

法 印(花押)

(裏書)

任御起請文、被寄進武庫下庄之間、此請文改了、

天福二年四月廿一日

知 事(花押)

武庫下庄

四 太政官牒

(太政官印)

太政官牒高野山

應爲公家御祈願所當山一心院事、

一心院ヲ御祈願所トナス

舊學侶方一派文書

右太政官今日下治部省符稱 得院主權大僧都法眼和尚位道勝、去嘉禎四年五月廿日奏狀稱、謹考舊貫、當山者、弘法大師親卜勝定、而期三會花林之地、眞言上乘盛令繁昌、而寫八葉蓮臺之峯也、因茲、一天俎頭、四海合掌、爰故行勝上人、結方丈草庵於當山、立護摩火壇於此砌、斷五穀之滋味而六十箇年、修三時之護摩而二萬餘日、練行倫少、薰修年久、故貴賤成歸依、緇素致隨喜、遂依多年宿願、忽建立一伽藍、堂塔、僧坊、鐘樓、經藏、成風之構接檐、土木之功並薨、卽號之一心院、本堂安置不動靈像并八大童子像、一堂者安置阿彌陀三尊兩界曼荼羅、以當山檢校以下宿老之禪侶數輩、補供僧、長日之行法並勤、三時之護摩無怠、加之、有每日朝暮之例時、有九旬安居之供花、種種之所作一令紹隆、然間、關東故右大將軍、惣信一山、別歸當院、以鎮西山鹿、粥田兩庄所當二百石、限永代、配置護摩用途、每年無懈怠令運送當院、已及四十年、爰仲村鄉者、去建永年中、國司寄付當院、配佛聖以下之寺用、大略爲滿寺之勤行、卽又爲一山之依怙、件鄉依爲弘法大師經行

本堂ニ不動像并ニ八大童子像ヲ安置ス

源頼朝山鹿粥田兩庄ノ所當ヲ護摩用途トナス

讚岐國司仲村郷ヲ寄進ス

莊號ノ繪旨

仲村郷ヲ院領トナシ堺ニ四至勝示ヲ打チ不輸ノ地トナシ伊勢役夫工、大嘗會召物以下ヲ免除ス道勝ヲシテ領家職ヲ相傳セシム

小槻季繼

藤原高嗣

之地、爲當山領之條、依有由緒、代代宰吏、已以當郷可爲當院領之由、成國宣之後、經三十餘年畢、而今被下庄號繪旨、欲斷向後之牢籠、望請天恩、因准先例、以當院爲御祈願所、兼以讚岐國仲村郷、限永代、爲當院領、堺四至打勝示、爲一圓不輸之地、伊勢役夫工、大嘗會召物以下、大小勅院事等、永被皆免、而領家職者、道勝可令門跡相傳之由、蒙勅裁者、惠燈挑光、偏積三密五智之精勤、梵鐘繼響、鎮祈天長地久之御願者、正三位行權中納言藤原朝臣爲經宣、奉 勅依請者省宜承知、依宣行之者、(太政官印)山宜承知、牒到准狀、故牒、

延應元年二月八日

(太政官印)

修理東大寺大佛長官正五位上行左大史小槻(季繼)宿禰(花押)牒
(高嗣)(自署)從四位上行右中辨藤原「朝臣」○太政官印
四類ヲ踏ス、

五官宣旨

左辨官 下 讚岐國

舊學侶方一派文書

官使ヲ遣シテ
仲村郷界四至
ニ勝示ヲ打タ
シム
多度郡
四至

應遣官使堺四至打勝示、公家御祈願所高野山一心院領當國仲村郷事、
在管多度郡

四至 東限吉田、葛原兩郷、南限善通寺一園、西限弘田郷、北限三井郷、

右得院主權大僧都道勝去嘉禎四年五月廿日奏狀稱、謹考舊貫、當山者、
弘法大師親卜勝定、而期三會花林之地、眞言上乘盛令繁昌、而寫八葉
蓮臺之峯也、因茲、一天巨頭、四海合掌、爰故行勝上人、結方丈草
庵於當山、立護摩火壇於此砌、斷五穀之滋味而六十箇年、修三時之護
摩而二萬餘日、練行倫少、薰修年久、故貴賤成歸依、緇素致隨喜、遂
依多年宿願、忽建立一伽藍、堂塔、僧坊、鐘樓、經藏、成風之搆接檐、
土木之功並薨、卽號之一心院、本堂安置不動靈像并八大童子像、一堂
者安置阿彌陀三尊兩界曼荼羅、以當山檢按以下宿老之禪侶數輩、補供
僧、長日之行法並勤、三時之護摩無怠、加之、有每日朝暮之例時、有
九旬安居之供花、種種之所作一一令紹隆、然間、關東故右大將軍、惣
信一山、別歸當院、以鎮西山鹿、粥田兩庄所當二百石、限永代、配置

護摩用途、每年無懈怠令運送當院、已及四十年、爰仲村郷者、去建永
年中、國司寄付當院、配佛聖以下之寺用、大略爲滿寺之勤行、卽又爲
一山之依怙、件郷依爲弘法大師經行之地、爲當山領之條、依有由緒、
代代宰吏、已以當郷可爲當院領之由、成國宣之後、經三十餘年畢、而
今被下庄號之繪旨、欲斷向後之牢籠、望請天恩、因准先例、以當院爲
御祈願所、兼以讚岐國仲村郷、限永代、爲當院領、堺四至打勝示、爲
一圓不輸之地、伊勢役夫工、大嘗會召物以下、大小勅院事等、永被皆
免、而領家職者、道勝可令門跡相傳之由、蒙勅裁者、惠燈挑光、偏積
三密五智之精勤、梵鐘繼響、鎮祈天長地久之御願者、權中納言藤原朝
臣爲經宣、奉 勅依請者、國宜承知、依宣行之、

延應元年二月八日 (高嗣) 大史小槻宿禰 (季繼) (花押)

右中辨藤原朝臣(花押)

六 阿闍梨延慶請文

夜部莊預所課役

(端裏書)

〔夜部莊課役請文 文永六年三月十二日、助阿闍梨〕

夜部莊預所課役

一 寂靜院年始菓子事、十二合、

一 丈六堂疊事、

內陣十二帖 高麗緣、

局二帖 上高麗、下紺若藍摺、

念佛所一帖 布緣、紺若藍摺、

承仕宿一帖 布緣、

半疊六帖之內 高麗緣一帖、曼荼羅御前殘五帖、布□(縁カ)

又禮盤半疊一帖 面唐莖、緣錦、以損可爲期、

一 御墓所疊事、

內陣六帖 上高麗、下紺若藍摺、

同半疊四帖內 一帖護摩堂、布緣、

已上五ヶ年一度、

阿闍梨延慶

夜部莊百姓

西金堂使者并
代福王左衛門
代官五郎莊內
クニテ滌妨ヲ働

一 丈六堂并御墓所明障子事、三ヶ年一度、

一 五房疊事、房別二帖、每年、

一 下司所役五節供事、

已上恒例課役、

一 臨時役事、逐可有其沙汰、

右條々事、請申畢、但案文云、臨時役事、(逐カ)逐可有其沙汰云々、然者、

其時可申子細之狀如件、

文永六年三月 日

阿闍梨延慶(花押)

七 夜部莊百姓等申狀案

夜部御庄百姓等謹申、

西金堂使者并福王左衛門代官五郎男等、於御庄內致濫惡、難堪子細事、御寺仰云賜事關東六波羅殿御教書、庄家安堵之上、不可隨堂家所堪之由、被仰下候之間、百姓等不令叙用候之處、今月七日 以前濫行閣之、

差下數多強了使御寺御使追出之後、當庄內作麥於荊取、百姓等住宅亂入志天、與妻子等恥辱、其不堪公毛供給志天、捨住宅令逃去、而間雖來東作之期、無耕作之營、單歎御庄內騷動、而間不堪法之譴責シテ、令濟進御年貢米百姓等在之、於一人依無可遁責之輩、如當時者、御領之田畠、可爲不作者也、仍百姓等愁餘、粗言上如件、

五月十日

夜部御庄百姓等上

八 澁谷道智請文

高野山寂靜院衆僧申、多田院御家人吉河藏人惟衡、令扶持惡黨人本智、濫妨九十九町下庄由事、八月五日御教書、同月十二日到來、謹拜見仕候了、任被仰下候旨、以代官相觸之處、代官請文如此候、以此旨可有洩御披露候、道智恐惶謹言、

(追筆)「永仁元」

八月十八日

沙彌道智(請文)(裏花押)

多田院御家人
吉河藏人惟衡
九十九町下庄
ヲ濫妨ス

沙彌道智

九 有賀充念請文

(端裏書)
「有賀五郎太郎入道請文」

高野山寂靜院衆僧申、攝津國多田院御家人吉河藏人惟衡、令扶持惡黨人本智、令濫妨九十九町下庄由事、去七月三日關東公文所御奉書、同八月五日惟衡今月廿日以前可召上由之御教書、同十二日謹下給候畢、任被仰下候旨、相御使澁谷三郎入道道智相共相觸候處、惟衡代官請文如此候、謹進上仕候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

(追筆)「永仁元」

八月十九日

沙彌充念(請文)(裏花押)

一〇 多田院政所代圓勝請文

(端裏書)
「多田院政所代請文」
高野山寂靜院衆僧等申、攝津國多田院御家人吉河藏人惟衡事、今月七日御教書今日同廿九日、到來、謹承了、此事亦被仰下候者、就公文訴狀先度觸遣之處、不及散狀云々、去九月始、因幡國下向、十月歸上候、其

舊學侶方一派文書

關東公文所奉書

惟衡召上ノ御教書

澁谷三郎入道道智

沙彌充念

圓勝施行狀ヲ
雜掌ニ付ス

政所代僧圓勝

間全不付給御教書候、所詮候、任被仰下候之旨、可召進惟衡之由、書與施行給雜掌候了、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

(追筆)「永仁元」

十一月廿九日

政所代僧圓勝(請文 裏花押)

一一 多田院政所代沙彌道教請文

(端裏書)

〔多田院政所代請文 永仁三 四 十八〕

寂靜院衆僧申
狀
新政所代道教
惟衡關東ニ參
上ス

就高野山寂靜院衆僧申狀、去三月二日御教書、今月二日到來、謹拜見仕候畢、抑下預候如御教書者、度々觸遣之處、不事行云々、此條道教新政所代候之間、先々御沙汰事、不存知仕候、雖然、任被仰下候旨、即可召進上當院御家人吉河藏人惟衡仕候之處、彼惟衡自去月上旬之比、參上關東由令申候、可爲何様候哉、以此旨可有洩御披露候、道教恐惶謹言、

(追筆)「永仁三」

四月十七日

沙彌道教(請文 裏花押)

沙彌道教

一二 多田院政所代道教請文

(端裏書)

〔多田院政所請文 永仁四 五 七〕

高野山寂靜院衆僧等申、多田院御家人吉河藏人惟衡事、如三月廿三日御教書者、來月十日以前可召進、仍而罷過期日而相觸候之間、請文令違期候之條、其恐不少候哉、彼惟衡關東參上之條、無其隱候之處、令進上綺筭請文之由、衆僧等掠申者歟、凡以在國、惟衡爭關東參上之旨可令言上候哉、且以此旨、可有洩御披露候、道教恐惶謹言、

(追筆)「永仁四」

五月一日

沙彌道教(請文 裏花押)

一三 仲村庄寂靜院方百姓等言上狀

仲村庄領家米
ノ内高野運上
百姓
大風損亡

讚岐國仲村御庄領家御米内高野運上百姓等謹言上、
欲蒙早任申狀之旨、御成敗大風損亡子細事、
件損亡子細、先度云御山、云當御庄、爲一體御事之間、令言上一紙候

之處、自寺用御方者、被差下御使兩人、任損亡實、雖蒙御計、不蒙半分御免除者、爭可令安堵哉之由、重令言上者也、所詮損亡顯然之上者、如寺用御方、爲蒙御免除、仍粗言上如件、

寂靜院方百姓

永仁四年十一月二日

寂靜院御方百姓等上

- 全 宗(花押)
- 有 正(略押)
- 有 元(花押)
- 武 安(花押)
- 宗 員(略押)
- 眞久瀧丸(略押)
- 清 量(略押)

一四 興福寺西金堂衆重陳狀

(端裏書) 西金堂衆陳狀 德治二十一年二月

興福寺西金堂

寂靜院雜掌聖
賢西金堂ノ夜
部莊本家號ヲ
停メシコトヲ
請フ
西金堂本家職
ノ安堵ヲ請フ

興福寺西金堂重辨申、

欲早申賜 寺家御舉狀、付進武家、就大和國夜部庄號高野山寂靜院雜掌聖賢、可止當堂本家號由、捧偽訴條、無謂次第也、早任嘉應寄進狀并關東御成敗、當堂本家職不可有相違由蒙御成敗子細事、

副進

(裏花押)

- 一通 關東御成敗狀案、堂家可爲本家職事、
- 一通 法輪寺別當寄進狀案、先進畢、
- 一通 九郎大夫判官殿御請文案、先進畢、

右當庄者、法輪寺別當以慇懃之寄進狀、嘉應年中仁寄附當堂、一百餘歲之以來、於本家職者、堂家進止之條、敢以無子細者哉、而右大將家御息大將法印坊、奉爲先考御菩提、所被宛置寂靜院寺用料所也云々、此條寄進于當堂者、嘉應元年也、寂靜院寄進狀、于今不備具書上者、併胸臆無窮偽訴也、堂家所帶法輪寺并九郎大夫判官殿狀、稱謀書由申條所見何事哉、速可明申者也、就中寂靜院申於關東御下知之狀者、爲

法輪寺別當西
金堂ニ寄附ス

堂家本家職之旨分明也、而乍帶彼御下知及訴訟之條、難遁違背咎被、召出彼御下知正文者、不可有其隱者哉、次雜掌解云、違背十箇度之召文、不參對云々、此條奸謀也、堂家雜掌者、御教書每到來、捧陳狀、御奉行付進上者、何可爲違背哉、所詮當堂爲本家職、送一百餘歲星霜、于今無相違上者、早可被停止寂靜院偽訴之旨、爲被仰下、重披陳言上如件、

德治二年七月 日

一五 權寺主澄寬書狀

(端裏書)
澄寬狀 德治二十一年

高野山寂靜院衆僧等申、大和國夜部庄三分米事、相尋西金堂家候之處、申狀^{副具書}如此候、子細載公狀候歟、賜御舉狀、雜掌可令參洛之由申候以此旨可有洩御披露候、澄寬恐惶謹言、

八月六日

權寺主澄寬

夜部庄三分米
西金堂申狀
寂靜院雜掌上
洛セントス
權寺主澄寬

辨寺主

進上 辨寺主御房

一六 足利直義御教書

東北院坊人等
闕所ト號シテ
夜部庄ヲ違亂
ス

高野山寂靜院雜掌申、寺領大和國夜部庄事、號闕所東北院坊人等致違亂云々、相尋子細之處、爲寂靜院領之上者、不可相綺云々、然者如元寺家領知不可有相違之狀如件、

(足利直義)
(花押)

建武三年十一月廿二日

寂靜院僧衆中

一七 沙彌某奉書

御祈禱卷數一枝、入見參候了、仍執達如件、

觀應二年正月廿二日

沙彌(花押)

寂靜院僧衆御中

參

一八 足利義滿御教書

(端裏書)
〔征夷大將軍源義滿公寄附狀〕

攝津國武庫九十九町内下莊
高野山寂靜院領攝津國武庫九十九町内下庄、大和國夜部庄事、任嘉祿安貞、弘安、建武、文和、應安度々裁許狀等、寺家知行不可有相違之狀如件、

明德二年十月十六日

從一位源朝臣(花押)

一九 權大僧都秀海奉書

一心院造營新所讚岐國仲村庄以下事、致興行之沙汰、可被專修造之由、可申旨候也、仍執達如件、

四月五日

權大僧都秀海奉

謹上 寂靜院衆僧御中

一心院造營料所讚岐國仲村庄
權大僧都秀海

二〇 六條中納言有藤書狀

後水尾院東福門院

(包紙ッハ書)
〔後水尾院様御后
東福門院様御拜覽之御書〕

(端書)
釋迦院前法務御房 有藤

追啓 被備 天覽、御機嫌之旨、自桑原黃門被申入候也、

今般高野山悉地院爲傳法登山、依之彼院兼帶寂靜院什物隨身、貴院以御取持法皇御所被入高覽、希有之古物品々相殘候段、殊勝思召候、則今日被返下候間、右之旨、可令申進由、御氣色之所候、被院主へ宜有御沙汰候也、恐惶謹言、

六條中納言有藤

(朱書) 享保乙巳十曆
八月廿二日

(朱書)
六條中納言 有藤

(裏朱書)
〔表書ニ悉地院兼帶ト在之事ハ、拙僧三年目寺役廻シ之内離山難成ニ付キ、泰雄閣梨醜翻山傳授之次テニ賴之故也、

享保十巳年九月 日

寂靜院 應昌

寂靜院應昌

舊學侶方一派文書

一九

二一 有雅書狀

(包紙ウハ書)
〔後水尾院様御后
東福院門様御拜覽之御書〕

(端裏書)
〔悉地院泰雄閣梨 有雅〕

追啓、六條黃門同又依仰、一通被差越候、是又寄附置候、以上、高野山悉地院兼帶寂靜院之什物、後伏見院宸翰、其外之品々、法皇御所叡覽之事、就被願申上、桑原中納言迄、相窺候處、無違儀及天覽、殊勝思召、別而叡感之旨、從彼卿以消息被申聞候、誠以珍重之事存候、仍而爲後代、彼郷之消息、其院遣置候也、

八月廿八日

有雅

後伏見院

(裏朱書)
〔表書ニ悉地院兼帶ト在之事ハ拙僧三年目寺役廻シ之内離山難成ニ付キ泰雄閣梨醍醐山傳授之次テニ頼之故也、

享保十巳年九月 日

寂靜院 應昌

二二 桑原中納言長義書狀

(包紙ウハ書)
〔後水尾院様御后
東福門様御覽之御書〕

(端書)
〔釋迦院前大僧正御房 長義〕

追而、彼院主江茂宜有御傳達候也、

内々以六條前黃門、被示聞候、高野山悉地院什物、今日被入天覽、則遂披露候、後伏見院宸翰御額、佛舍利、弘法大師御筆兩界曼荼羅、其外官符口宣等數多相殘候事、彼是殊勝ニ被思召、逐一御覽、御機嫌之御事候、右宜申入旨、御沙汰候、仍得御意候、恐々謹言、

(朱書)
〔享保乙巳十年〕

八月廿一日

(朱書)
〔法皇御所評定衆 桑原中納言〕

(裏朱書)
〔表書ニ悉地院兼帶ト在之事ハ拙僧三年目寺役廻シ之内離山難成ニ付キ、泰雄閣梨醍醐山傳授之次テニ頼之故也、

享保十巳年九月 日

寂靜院 應昌

法皇御所評定衆
桑原中納言長義

後伏見院宸翰

〔五坊寂靜院文書第二〕

二三 後醍醐天皇綸旨

御祈禱事、可致精誠之由、被仰下之狀如件、

(延元二年)
三月廿六日

勘解由次官(花押)

一心院僧衆

一心院僧衆中

二四 後醍醐天皇綸旨

大和國夜部庄、止方々妨、可令全知行者 天氣如此、悉之以狀、

(延元二年)
三月廿六日

勘解由次官(花押)

後醍醐天皇夜
部庄ヲ安堵セ
シメラル

一心院僧衆中

二五 後醍醐天皇綸旨

大和國夜部庄、止方々妨、可令全所務給者、天氣如此、悉之以狀、

五坊淑靜院文書(二)

二二 後醍醐天皇御旨

御祈禱事、可致精誠之由、被仰下之狀如件、

三月廿六日

勘解由次官花押

一心院僧衆中

二四 後醍醐天皇御旨

大和國夜部庄、止方々坊、可令全知行者、天氣如此、悉之以狀、

三月廿六日

勘解由次官花押

一心院僧衆中

二五 後醍醐天皇御旨

大和國夜部庄、止方々坊、可令全所務給者、天氣如此、悉之以狀、

後醍醐天皇御旨
大和國夜部庄、止方々坊、可令全所務給者、天氣如此、悉之以狀、
勘解由次官花押

五月三日

寂靜院僧衆中

少納言(花押)

二六 後醍醐天皇綸旨

大和國夜部庄、任去年三月廿六日 綸旨、止方々妨、知行不可有相違者
天氣如此、悉之以狀、

延元三年二月十五日

右中辨(花押)

寂靜院僧衆中

二七 後村上天皇綸旨

後醍醐天皇御菩提(事)、先度被仰了、每月十(六日カ)、殊可奉訪果位者
天氣如此、悉之以狀、

正平三年二月廿五日

左少辨(花押)

寂靜院僧衆等中

後醍醐天皇御
菩提ノタメ、
毎月十六日
申ヒ奉ラ
シメラル

二八 後村上天皇綸旨

御祈禱事被聞食了、尤神妙、近日殊可抽精誠者 天氣如此、悉之以狀、
正平三年二月廿五日 左少辨(花押)
寂靜院僧衆中

二九 後村上天皇綸旨

御祈禱事、近日殊可被抽精誠者 天氣如此、仍執達如件、
正平六年正月廿九日 少納言(花押)
寂靜院僧衆中

三〇 後村上天皇綸旨

後宇多院并 後醍醐天皇御菩提事、殊可奉資證果者 天氣如此、仍執達
如件、

後宇多院并
後醍醐天皇御
菩提事
シメラル

正平六年正月廿九日

少納言(花押)

寂靜院僧衆中

三一 後村上天皇綸旨

御祈禱事、寂靜院僧衆等狀 奏聞之處、尤以神妙、天下太平、當年御
重厄、殊可抽懇祈之由、可被仰遣之由 天氣所也、仍言上如件、
正平十五年二月五日 少納言信實奉

進上 護持院僧正御房

三二 後村上天皇綸旨

御祈禱事、近日殊可抽精誠者 天氣如此、仍執達如件、
八月廿一日 左少辨(花押)
寂靜院僧衆等中

天下太平當年
御重厄ヲ祈禱
ス

護持院僧正

增進律師ノ願
望ニ依リ一心
院内ニ堂舎一
宇ヲ建立ス
不斷如法經

勸修寺政顯

依增進律師願望、於高野山一心院之墾内、建立堂舎一字、安置佛舍利、可勤行不斷如法經之由、被聞食了、宜專佛法之紹隆、奉祈聖祚之長久者、天氣如此、悉之以狀、

文明七年五月六日

右中辨(勸修寺政顯)(花押)

三四 後柏原天皇綸旨

後土御門院御
苦提ノタメ不
斷勤行ス

高野山一心院之内寂靜院事、文明 勅裁旨、被聞食畢、然又奉爲後土御門院御菩提、不斷勤行云々、旁以神妙也、彌專佛法之再興、奉祈聖運之長久者、天氣如此、仍狀如件、

文龜三年八月十二日

在中辨(廣橋守光)(花押)

增進上人御房

廣橋守光
增進上人

三五 後柏原天皇綸旨案

寂靜院鎮守勸
請
龍神大明神々
號

高野山一心院内寂靜院、爲不斷如法經、鎮守諸神勸請、神躰奉獻并龍神大明神號事、任先例可被致其沙汰者、依 天氣執啓如件、

萬里小路賢房

右中辨(萬里小路賢房)

文龜二年九月十日

吉田兼俱

謹上 侍從二位殿(吉田兼俱)

〔五坊寂靜院文書第三〕

三六 吉田兼俱書狀

神體靈璽
神號宣旨

〔包紙〕
「法皇御所評定所桑原中納言殿」
神躰靈璽並 神號 宣旨事、依 大職冠御附屬當院奉行事、一朝之規範候乎、去延長五年十二月廿六日、三千餘社御躰奉獻以來、連綿事候、次神號宣旨同前候、今般高野一心院内諸神勸請並神號等事、其方内々

可被經 奏聞由承候、被仰出候者可得其意候、恐々謹言、

(文龜二年カ)

九月三日

(吉田)
兼 俱

吉田兼俱
増進上人

増進上人御房

三七 土井大炊頭利勝書狀

返々、御文かたしけなく存候て、まつく御いとまこいに參候て
申上へく候、めてたくかしく、

御文かたしけなく存たてまつり候、仰下され候ことく、昨日御城にを
いて、かすか殿までまいり候ところに、御出なされ御めにかり、一
しほまんそくつかまつり候、御志あハせよく御いとまかたしけなく、
おほしめすのむねその意をえ、もつともそんなしたてまつり候、さて
ハかうやのじやくじやう院御てし、それさま御むすこ御坊ニて御さ候
しか、御めみえなされたきにつき、師弟子ともニ御くたり候ま、御

めみえあいすみ候やうにとうけ給候、さぬき殿、いつ殿いづれも御ま
へしゆと申たんし、すこしも御ふさをそんしいたさす候、めてたく
かしく、

卯月七日

と平 (利勝)
おほいの頭

土井利勝

權大なこんさま

御返事

三八 土井大炊頭利勝書狀

返々、一日も申上候ことく、國母様御まへしかるへきやうに御とり
なし、あらハし下さるへく候、こんと御まきものなとたくさんに、
はいりやうつかまつり、めうかしこく申上かたく候、かやうのき
をもよろしく御耳にたてさせられ下さるへく候、めてたくかしく、

御文かたしけなくそんしたてまつり候、仰乃ことく一日ハ御いとまこ
ひととして、しかういたし候ところに、御めにかゝり、かたしけなくそ
んじたてまつり候、扱ハ高野しやくしやう院(師弟子)してしともに、御めみえ
のきうけ給候、今日もわたくし所にて御めにかゝり候、すこしも御ふ
さをそんじいたさす候、はた又つた九十郎殿御事、其身ハあいはて
られ候へとも、九十郎殿おちニて候九郎左衛門殿事うけ給候、これ又
御ふさをそんせず候、こしもと御用もこさ候ハ、仰つけらるへく候、
めてたくかしく、

卯月十一日

とキ(和勝)
おほいの頭

こん大納言さま

御返事

三九 權大納言某書狀

五月の祈禱
日待

しるしまてにて御入候、御ちこへも(目録)くろくのことくまいらせ候
ま、御うけ取候へく候、返々五月のきたうにへつしてごま七さ、
日まちもめされ候て給候よし、かすくめてたくおかしく思ひま
いらせ候、返々御ちこによく御しつけ候て、いたつらに成候ハぬ
やうに、てならいかくもんよく御させ候て給候へく候、めてたく
かしく、

よくそ人を給候、御かしく思ひまいらせ候、此月のきたう御さた候て(手)
ふたたまハリ、ならひニ一はこ給候、かすくめてたく久しくと、いわ
ゐ入まいらせ候、おちこもいよくそくさ井にて、おとなしく御入候(習)
よし、めてたくおかしく思ひまいらせ候、五月五日よりてならいもし
まいらせ候よし、いよくよく御しつけかん用にて御入候、ほうしや(寶性)
う院いつれもその外の衆よりも、御ちこへゐんしんのもくろくよくそ
御こし候て、くわしくみまいらせ候、ほうしやうゐんゑハすなハち返
事申候ま、御と、け候へく候、又此もくろくのことくそもしさまへ

まいらせ候、いく久しくとかしく、

五月

廿一日

こん大納言

より

しやくしやう院殿

まいる

四〇 權大納言某書狀

なにもくよきやうにたのみまいらせ候、又そもしさまも此もく
ろくのことくまいらせ候、いく久しくと御いわ井候へく候、めて
たくかしく、

文そ御かしく思ひまいらせ候、かくもやうく^(正聲カ)出き候はんま、御心
やすく候へく候、さやうに御入候へハ、うわふきのかね銀子壹貫め、
此しそくにわたし候ま、御うけ取候へく候、ちそうのかねもわか^(我身カ)ミ
壹人、御くり候はんと思ひまいらせ候へハ、みなくきたうに御くり

たきよし御申候ま、すなハち此かきつけのことく^(奉加カ)ほうかにいらせ申
候、のこる所ハいかほとにても、わか^(我身カ)ミまいらせ候へく候、此かきつ
けのことくた、今しそうへわたし申候ま、たしかに御うけ取候へく
候、かしく、

廿一日

こん大なこん

しやくしやう院とのへ

四一 權大納言某書狀

又此ほつかい一か、文の折ふしみ候ま、まいらせ候、御なくさみ
に候へく候、かしく、

さきほとハ文給御かしく思ひまいらせ候、御返事まいらせ候はんとか
きまいらせ候へハ、はやノつか井かへりまいらせ候て、御返事も申
さす候、^(學カ)かくもやかてあそハし候て、下され候はんよし仰られ候ま、

御心やすく候へく候、めてたくかしく、

月 日

こん大納言

より

しやくしやう院

とのへまいる、申給へ、

四二 權大納言某書狀

(包紙ウハ書)
「かうやほうしやう院まいる」

またハかくはんゆたんましハリ候はんま、おそからぬ事と申候
所、もはやとしもよられ候ま、まつく寺をわたしたきよし申
され候ま、さやうに候ハ、いかやうニもしやくしやうゐんした
井カと申候て、そうゑんはうニ寺をうけとらせまいらせ候ま、そ
こほとにてもよきやうニたのみ申候、わかき物にて候ま、何事



も御いけんめされ候て給候へく候、たのみ入まいらせ候、又その
はうそう正義の事も、我身をたのむよし、しやくしやう院御申候
つるま、そのよしうか、い候へハ、はやく御まへすみまいら
せ候、そう正義めされ候よしうけ給候、數々めてたく思ひまいら
せ候、なをめてたき事うけ給候やうニといわ井カ入まいらせ候、め
てたくかしく、

こんとしやくしやう院そうゑんはう、し(上洛カ)やうらくにつき一筆申上まい
らせ候、いよくそのはう御そく才のよしうけ給候、めてたく思ひま
いらせ候、いつも御ねん比のよし御かしく思ひまいらせ候、さやうに
候へハしやくしやう院ゐんきよ候て、寺をそうゑんはうニわたし申た
きよし申され候ま、そうゑんはうちやくはいと申候、めてたくか
く、

權大納言

かうや
ほうしやう院

まいる

四三 權大納言某書狀

返々御ふみのうちの事、よく／＼申あげ、さま／＼御心やすく候へく候、いかさま御けもしのおりふしめてたさ申候へく候、又かしく、返々正月にハ、いそき／＼御ふうとも御あげ候へく候、おそく候へハわれ／＼(江戸カ)とへくたりるすにて候、さま／＼その御心へ候へく候、めてたくかしく、
(忌加持)御きかほしほうしやうゐんへよく御申候へハ、御かんすんまいり御せい二御きかほめされ候よし、かす／＼めてたく思ひまいらせ候、國母さま七日御しやうしんの事、七日め二御ふうともまいり候事、なにも／＼よくかんすん申候、さりなからいまた月の物いて申候ま、正月のちふんかよく候て候へく候、正月廿日ちふんかならす／＼御ふうとも御あげ候へく候、正月のすへにハわれ／＼とへくたり、さま／＼御入候へハなり候はんよし、そもしさま御のほり候ハても、かきつけ

にてもなり候ハ、よくかきつけて候て給候へく候、(自身カ)しんもちて御のほり候ハ、おそく候はんかと思ひまいらせ候、それハいかやうにもそのほうしたいにて候て候、ほうしやうゐんへもよく／＼御申候て給候へく候、めてたくかしく、

十二月十四日

しやくしやうゐんまいる

こん大納言

申給へ、

四四 權中納言某書狀

返々、かき物ともくわしくみまいらせ候て、かす／＼御かしく思ひまいらせ候、くわしくハこんそうすへ申まいらせ候、かしくこま／＼と文給御かしく思ひまいらせ候、(女房カ)ことによほうきやうのかき物、御てらのゆらいのかき物給候、くはしくみまいらせ候て、あり

かたく思ひまいらせ候、によほうきやうも秋のひかんに御つとめ候ハ
んよし、御うれしく思まいらせ候、何やうにもそもしさまため入ま
いらせ候ま、ちきやうにめされ候て給候へく候、きやくしゆのなも
(過)くわこちやうに御のせ候よし、かすくくわしく思まいらせ候、御か
しく、

三月十五日

かうや
しやくしやう院殿
まいる

こん
中なこん

四五 權中納言某書狀

返々、けちくわんのときかうやより御のほり候ハ、その折ふし
ハわが身その御所さまへまいり候て、くわしくうけ給候へく候、
御返事にて文給、御かしく思ひまいらせ候、かうやよりた、今わさと

人まいり候よし、さんくきとくなる御事と、かすく御かしくめて
たく思まいらせ候、ハんとし候ハ、はしもとたいまいりにまいらせ候
ハんと思まいらせ候へ共、昨日もそもしさまへ御物かたり申候ことく、
今ほとハ山たちことの外おほく御入候よし申候ま、御のこりた、な
からまいらせ候ましく候、かうやへも此のよしよく御申度かて給候へ
く候、けちくわんのときハかうやより人御こし候らんま、その折ふ
しくわしく申入候へく候、かしく、

こんさうすまいる

御申給へ、

こん中納言
より

四六 進上目録

(端裏書)
「かう屋しやくしやう院とのへ」

銀子	二枚
すき原	十てう
みかん	一折
こふ	一折
大樽	二ツ

以上、

四七 御引出物目録

きん中さまより、	
すき原	十帖
銀子	貳枚
國母さまより、	
銀子	五枚

以上、

四八 兩界曼茶羅裏書

(包紙ッハ書)
「御まんだらのうらかき しゃくしゃうゐん」

御まんだらのうらかき

此りやうがいのまんだら、こうばう大しの御筆なり、(表カ)
ひよう具(修)
(覆カ) 國母様御きしん御つかい權大納言、花屋妙庵、
ふく

寛永十六年霜月吉日

しゃくしゃうゐん

弘 惠

四九 御馳走奉加帳

御ちそこのほうかに御入候覺

(體カ)

一廿たい
 一十五たい
 一五たい
 一十たい
 一十二たい
 一六たい
 一三たい
 一たい
 一二たい
 一十二たい
 一五たい
 一十たい
 一十貳たい
 一十たい
 一五たい

宮内卿
 まつ山殿
 めうあん
 のと殿
 おくら
 中つかさ殿
 おさし
 ちやく
 お五う
 せんし殿
 さきやうとの
 しきふ殿
 梅かうし殿
 ふせん殿

一二たい
 一二たい
 一五たい
 一十たい
 一五たい
 一貳たい
 一五たい
 一貳たい
 一五たい
 一五たい
 一二たい
 一十二たい
 一五たい
 一五たい
 一壹たい

は
 こしう
 おつまノ御かた
 めくしけ殿
 おあこの御かた
 おふり
 すきた
 おふく
 おたね
 おこま
 (お五や
 おむめ
 おかい
 (おちや
 おさな
 しな

一壹たい
一三たい
一四たい
一三たい
一貳たい
一三たい
一二たい
一三たい
一貳たい
一たい
一壹たい
一壹たい

ちい
たま
ちよほ
いし
いちや
くす
むす
かね
かの
こちや
なへ
めうあん
まき
こな

一三たい
一三たい
一壹たい
一五たい
一三たい
一二たい
一三たい
一一たい
一七十二たい
以上合三百四たい、
一十たい
一十たい

ふう
やまち
つた
ては
ちや
あけまき
きち
とこなつ
大多殿
うちのとのきやくしゆ
長生院殿

五〇 松平信綱書狀

かへすく、御のほり參候て申上へく候、かしく、
 さきほとは御ふみ、こと更なかい一折をくり下され、まことに御こ、
 ろつきのたん、かたしけなくそんしたてまつり候、まつもつてんき
 よく御さ候ハ、十三日ニ御のほりなされ候はんよし、御もつとも
 そんし候、つきにきは良殿御事そんし御(請待カ)しよたい申ましく候ま、御
 こ、ろやすかるへく候、はたまたそうゑん御はう御めへのおほせこ
 され候、御ふみのとをりおほ井(天炊)とのさぬき殿へ申入候、十五日にハ御
 つゐて御さあるへしとそんし候、すなわち御返事申上へく候ところ、
 御しろにまかりありおそなハリ候へく候、めてたくかしく、

松平信綱

卯月十日

松平

いつの守

信綱(花押)

權大納言様

御返事

五一 兵部卿某書狀

かもんさまよりも、よくく心して申まいらせ候へとの事にて候、
 猶々めてたさ申候へく候、かしく、
 一筆とりむかひまいらせ候、一は御めにか、りありかたき事をちやう(聴)
 もん(聞カ)いたし候て、御かしく候、ことに昨日ハ色々かもんさまへもわか
 身ゑも下され候て、御かしく思ひまいらせ候、いく久しくといわ井ま
 いらせ候、めてたき文のしるしまてに、まき物一まきまいらせ候、い
 く久しく御しるしになりまいらせ候て、申うけ給候やうにとのしるし
 までにて御入候、かしく、

ひやうふ卿

より

しやくしやうのんさま

まいる

五二 めわら書狀

返々、御れ井すみまいらせ候て、めてたくおほしめし候よし、よく申し候へく候、そうゑんほうさまへも、事つと申入候よし、たのみ申候、めてたくかしく、

こま／＼と文み申候、まつ／＼十五日に、御してしともに、上様御め見へすみまいらせ候よし、數々めてたくそんし候、(春日カ)かすかさまへも申あけ候へハ御まんそくの事にて御さ候、かやうの事わ御かうぎむきの事にて御さ候へハ、御ないせうにてかすかさま仰上られ候事儀申まいり候ゆへ、大井殿さぬき殿まてたのませられ候よし申せ候へく候、さて又兩大納言さまへ御れいの事、上さまへ仰上られ候事も、こうぎむ

きに候へハならず候に、大なこんさまへの事さためてけい光るんさまニ、こん大なこんさま仰おかれ候ハ、けい光るんさまさためて御きもいらせられ候はんま、その儀候へく候、

しやくしやう院さま

めわら

より

御返事

五三 老女ふく書狀

此廿めのうち、月(牌カ)はいもいれまいらせ候ま、そのよしよく仰られ候て給候へく候、めてたくかしく、

このかね廿め、かうやしやくしやうのんへ、れうせつの御心さしにま(骨)いらせ候て給候へく候、そのおりふしも御きやうなと御おくり候、こ(カ)つをわけてをき申候ま、かうやに御おさめ候て、よく／＼御ゑこう候てまいられ候へのよし、仰られ候へく候、かしく、

月牌料寄進並
納經シテ遺
骨ノ供養ヲナ
ス

廿七日

こんさうす

御申給へ、

光さまより

ふく

五四 見松院惠吟書狀

尙々久敷不得尊意候間、御失念可被成と存候、兵右衛門殿より書狀進上御仕候、其已來御無音奉背本意存候、以上、其已來久不得尊意候、御無事御座候哉、爰元橋本殿御所方御無事ニ被成御座候、

柳原黃門登山

一 柳原黃門様、其他へ忍ニ登山被成候、拙者御檀那ニ御座候、無御存知振ニ被成、御馳走被成可被下候、前廉御先祖寶勝院(寶性カ)と哉覽宿坊之様承候へ共、久敷事候之故、貴院様奉頼存候、即知恩寺々中衆ニ瑞林院惠春と申僧、御供被申候而被參候之間、惠春房委御物語可被申

候、次橋本殿御内九里兵右衛門殿より書狀參候間、則進上仕候、何茂御下山之刻可奉期拜顔候、恐惶敬白、

百万遍之内

見性院

惠吟(花押)

六月十一日

寂靜院法印様

御法床下

〔五坊寂靜院文書第四〕

五五 千阿彌陀佛施入狀

奉施入

所領一所

在大和國十市郡、號夜部庄、

千阿彌陀佛大
和夜部庄ヲ寄
進ス

右件庄者、關東將軍家之領也、相傳有由領掌年尙、敢無其妨、而今高野山五室谷建立伽藍、號寂靜院、安置尊像、彼佛聖燈油已下人供雜用等料、永所施入也、後代更不可有他妨、若背此旨有致違亂之輩者、常住本尊護法善神速垂明鑒、須加證罰而已、者限永代所施入之狀如件、

嘉祿三年七月十七日

千阿彌陀佛

五六 成法坊舍賣券

賣渡 房舍壹宇事、

在一心院北谷法力房之坊跡、其面四間半也、

右件坊舍者、自先師法力房之手所讓給于成法實也、而於彼坊舍者、去正應年中爲類火燒失畢、仍勵私力如形所造建也、然而依有要用、直錢拾貫文仁、限永代賣渡于大樂房者也、無他妨可御進退領知也、仍爲後日證文之狀如件、

正和五年丙辰二月三日

成 法(花押)

五七 成眞田地賣券

(端裏書)
「アシタニノタノモシ 星山村」

奉去却田地立券文事、

合壹所者(在六箇御庄內星山村、
字赤左鼻、)

四至(在カ)
王本券、

右件田地者、成眞私領進退領掌之處也、雖然今依述(マ)計懸大用、限永代宛現錢分參貫文、相副本券壹通、于日高源太郎殿所奉去却實矣、更無相違可令知行給者也、若後日万壹違亂相論出來時者、速可奉返本錢者也、仍爲後代龜鏡、放新券文之狀如件、

延元參年戊寅舊七月十六日

成 眞(花押)

五八 菊圓坊舍田地等讓狀

讓與 坊舍并田地事、

合坊舍一字在一心院北谷、

伊富里 田地二所紀伊國政所伊富里、字四至在本券、

右坊舍一字、同雜具等并伊富里田地二所、相副田地本券四通、并坊舍文書二通、所讓與德萬也、更不可有他妨、坊舍買得之時者德萬相共代物沙汰畢、今一具ニ所令讓與也、仍爲後日狀如件、

正平十年乙未三月十六日

菊 圓(花押)

五九 万善坊舍讓狀

讓與 坊舍事、在一心院內北谷、

右坊舍者、万善私相傳坊舍也、而隨了房仁限永代於所讓與實也、無他

綺可有領知物也、但借物貳十伍貫文アリ、可被返之候、仍爲後日狀如件、

明德二年^(四)西^(四)六月一日

万 善(花押)

六〇 信宗房田地讓狀

(端裏書)

一永讓 信宗房壽憲書記ニせうふ帳

永讓與 信宗房壽憲書記ニせうふ帳

合小四十步者 在井上本御庄内ミヤノアラ 一行正名内ナリ、

四至 限東 岸堺、 限南 溝堺、 限西 楠松作、 限北 乙熊作、

右件之田地者、信宗房先祖相傳之地也、而今限永代ヲ本券文を相副、憲壽書記ニ讓與事實正也、全以不可有他人妨者也、仍爲後日證文狀如件、

應永廿三年丙申十月廿八日

信宗房 (筆軸印)

定舜法師（持明院譜代ノ下人）

六一 行長法師去狀

去進 定舜法師事、
右彼法師者、雖爲持明院譜代之下人、依智莊嚴院蒙仰去進者也、永代可有御進退之狀如件、

應永廿七年庚子三月六日

行 長（花押）

六二 大塔貝吹承仕職補任狀

大塔貝吹承仕職

補任 大塔貝吹承仕職之事、

右以人（彼脱カ）補彼職、然者恒例之所役等、無懈怠可令勤仕者也、故補、

寬正四年癸未三月七日

法印大和尚位 弘算（花押）

六三 大塔承仕職補任狀

補任大塔承仕職事

定 乘

右以人（彼脱カ）補彼職、然者恒例之所役等、無懈怠可令勤仕者也、故補、

寬正二年九月十日

法印大和尚位 弘算（花押）

六四 澁河鏡種寄進狀

加賀國河北郡
樫久目領家方
ヲ寄進ス

奉寄進加賀國河北郡內樫久目領家方事、

合壹所者

右件之在所者、雖爲重代相傳私領、高野山一心院之內寂靜院五坊之如法經所仁、爲後生菩提、限永代、奉寄進之處也、然上者、雖爲子々

如法經料所

舊學侶方一派文書

孫々、不可有違亂妨者也、若背此旨、致違亂輩在之者、爲上意、堅可被致御罪科者也、仍末代爲龜鏡、寄進狀如件、

澁河中務少輔

澁河中務少輔

文明七年乙未六月廿七日

鏡種(花押)

六五 金光院鎮座等連署山林寄進狀寫

奉寄進 山林之事、

石塔造立ノ地
ヲ除ク

合壹所者

一心院內寂靜院谷、東限御社山之境堀、南北西限山之峰通、但石塔造立之地可除之云云、

右山林者、從往古至于今時雖爲一心院之計、依增進上人之所望、別而奉施入于寂靜院五智坊之不斷如法經者也、就之院家江用途拾貫文、禮錢之分請取申、仍爲後日支證之趣如件、

文明十六甲辰年六月廿一日

永泰院 英判
連座 進判
全坊

金光院

鎮座判

寂靜院

增進上人

(裏書)「連坊ハ連上院事也」

六六 增進上人法華經板木置文

法華經板木ヲ
開板

(端裏書)「エチセノ國ニ是有候、法花經板木之事」

法華經板木之事、高野山一心院如法經爲經料、此板木開候、殊ニ南都に如法經料之田地候、沽却仕又此方にて勸進申開板候間、每年板質無懈怠一心院江上可申候、次ニ泉藏房進光坊加判候、又小林中務丞殿此板木過分勸進御入候之間、後々迄も憑申候間、彼方無沙汰候者、被加御異見候へと堅申合候、不可在他之妨候、仍爲後日證狀如件、

永正拾二年^(四)丁丑三月廿八日

增進上人(花押)

上人様堅蒙仰候間、雖斟酌候、加判仕、於以後御尋之儀候者、此趣可申由子共申付候也、

泉藏房 任 快(花押)
進光房 英 亮(花押)
小林中務丞 吉 秀(花押)

六七 増進上人等連署法華經板木掟書

(端裏書)
増進上人ヨリ 春慶房渡

板木代物
每年上納

雖板木可上申候、旁不可然候之由異見候間、上不申候、然間御經摺候へ共不摺候へ共、毎年貳貫文宛上可申候、若無沙汰候へ、愚僧逝去之後者、爲其方進退可被召上候、其時違亂申間敷候、仍爲後日所掟如件、

(追筆)
「若貳貫文外摺之
いかほとなり共上可申候也」

實勝房 慶 鎮(花押)
寶藏房 實 春(花押)
進岩房 英 毫(花押)

進藏房

眞 雄(花押)

増進上人(花押)

大永二年壬午四月一日

〔五坊寂靜院文書第五〕

六八 高野山御幸勘文

(端裏書)
「帝王高野山御幸之事」

帝王高野山御幸之事

寛治二年二月廿六日
同 五年二月十九日
天治元年十月廿七日
天治二年十一月四日
長承元年十月七日

白川院寂初御幸
同院第二度御幸
鳥羽院寂初御幸
白川院鳥羽院御幸 白川院第三度、
鳥羽院第二度、
鳥羽院御幸 第三度、
斯時宇治殿忠實供奉、

仁安四年三月十七日

(後、以下同ジ)
御白川院御幸

建永二年三月廿五日

御鳥羽院御幸

正嘉二年三月廿三日

御嵯峨院御幸

正和二年八月六日

御宇多院御幸

寛永元年甲子九月九日

高野山
寂靜院

六九 寂靜院坊號由來

(端裏書)「高野山一心院寂靜院五坊之號被付事」

寂靜院五坊ハ元ハ三坊ナリ、妙法ノ二坊一ナリ、蓮智坊別ナリ、花經ノ二坊又一ナリ、妙智坊ニハ明遍僧都御渡アリ、法智坊ニハ本願御座、元ハ是坊號ナシ、□□本願問給テ云、此坊舎ヲ坊號ツクヘク候や、答云、安樂ニハ五坊ヲ立テ坊號ヲツケ候、又南都ニモ三面ノ僧坊ハ連坊ニテ候ヘトモ、各々ニ坊號候ヘハト計候ヘト御返事アリ、不思議ニ蓮智坊ハ是ニ御座候ヤト

寂靜院元ハ三坊、後ニ五坊トナル

蓮智坊ハ本願

尋申、照阿彌陀佛答云、蓮智坊トハ何人ノ御事候ソト返事アレハ、本願ノ御事ニテ候ト尋申不思議事ナリ、其後本願不思議ノ思ヲ成給テ、當地妙法蓮華經ノ五字ヲツケ、新安樂ニハ五智ヲツケラル、間、兩所ヲ含メ當地ノ坊號ハツケサセ給ナリ、中坊殊ニ蓮智坊トヨシアル間、本願ノ御本尊安置シ奉ラル、ナリ、此御本尊ハ三身即一ノ義ヲモテ被作ラル、ナリ、ヒラケハ三身ヲサムレハ一身ナリ、故ニ三身即一ト申ナリ、又妙智坊ニハ本願阿字ヲ御本尊トス、

七〇 弘惠和尚檢校帳

第二百二十七代檢校執行法印大和尚位弘惠假名圓識房、所住寂靜院、

執行代補施洛院叟遍良順房

釋ノ弘惠姓ハ中西、和州添ノ上ノ郡筒井人也、年甫十有五ハシメテ登ル高野山ニ、
師トシ事ツカヘテ寶性院ノ政遍闍梨ニ稟ウク密灌ヲ、後ニ又從ヨツテ僧正盛公ニ與ニ金剛三昧

院ノ良算同ク入^{ニテ}密壇^ニ沐^{ボクス}兩部灌頂ノ誓水^ニ、先^{サキ}是^{ヨリ}移^ル寂靜院^ニ一
 年^シ三十有六、寬永十有三年春ル二月、年^シ六十四^{ニテ}補^{セラル}檢按職^ニ
 住^ス青巖寺^ニ、治山二年、十有四年冬十有一月辭^{シテ}職^ヲ退^{ニク}于寂靜院^ニ
 齡七十有^{ヨハヒ}二^{ニテ}而今猶存^ス焉、二十有一年夷^イ則上翰^{カン}書^ス、
 一心院五坊寂靜院弘惠

七一 寂靜院文書目錄

目錄

- 一 綸旨 十二通
- 一 御勅額 壹
- 一 證文 五通
- 一 寄附狀并下知狀等 三十通
- 一 御舍利殿 壹

- 一 御過去帳 二卷
- 一 弘法大師眞筆兩界 二軸

以上

高野山一心院谷學侶方五坊 寂靜院

〔親王院文書〕

七二 成就院乘鏡屋敷賣券

限永代賣渡申本中院新藏院屋敷之事、

合壹貫文者

右件敷地、本中院之内成就院乘鏡房之雖爲^(知カ)地行、依有用要、限永代親
 王院乘本房江直錢壹貫文ニ被御渡申處明鏡也、萬一違亂妨人候ハ、可
 爲盜賊候、仍後日狀如件、

永祿四年辛酉卯月十六日

主本中院内成就院 乘鏡房(花押)

親王院乘本坊參

口入人
遍照院(花押)

七三 本中院藏本坊舍屋敷賣券

限永代賣渡申本中院ノ金藏院並坊屋敷之事

合拾四貫文者

右件坊舍並敷地水共ニ、藏本本中院惣院内々評定トノ、限永代乘本房親王院江被御渡申處明鏡也、彼金藏院トテハ分院中ノ役並寺家惣山ノ役壹錢之義也共、限永代有間敷候、親王院分迄ノ可爲院役候、萬一違亂妨人候ハ、可爲盜賊候、仍爲後日支證如件、

藏本本中院惣院中

同藏本成就院(花押)

永祿四年辛酉卯月十六日

兩年行事

金剛院(花押)
成就院(花押)

寺家惣山ノ役

口入人
遍照院(花押)
同
花藏院(花押)

親王院

乘本房參

七四 遍照院坊舍屋敷賣券

限永代賣渡申本中院ノ内中性院坊舍并屋敷之事

合六貫文者

東ハカキサイメ、南ハミチカキリ、
西ハカキ、北ハカキサイメ、此カキハ
ウエヨリスルナリ、

右彼坊舍并屋敷共、限永代、六貫文ニ賣渡申所明鏡也、四至方地(マ)小も違亂之義有間敷候、其外全一義之子細申間敷候、仍爲後日狀如件、

永祿十年丁卯八月十六日

賣主本中院之内
中性院(黒印)

遍照院(筆軸印)

本中院之内
親王院參

七五 遍照院坊舍賣券

賣渡申坊舍之事

四至 東ハ限寶藏院堀、南ハ限岸道、西ハ限隣之垣、北ハ限岸

右之坊舍、面ハ四間半妻へ六間、土藏は壹間半ニ貳間也、此坊其之儀は大阪寺町淡路守殿爲御逆修善根、銀子五百目ニ永代賣渡申所實正明白也、然は於此坊舍は末代他之違亂さまたけ不可有之者也、仍永代賣券狀如件、

慶長六年辛子八月十五日

賣主南谷

遍照院(花押)

千手院之内

口入

増福院(花押)

理性院參

口入

釋迦文院(花押)

七六 新介重時坊舍寄進狀

奉寄進坊舍之事

先年寺町淡路守爲逆修買申寺也、所者高野山南谷仁在之、但程遠カツテ不自由御座候者、御近所ニ坊舍被成御買、末代相續候様御才覺候段奉願申候、指引算用仕候而銀子四百目御座候、則賣券進候、後日違亂有間敷候、仍寄進狀如件、

于時慶長十一年丙午五月二日

寺町新介重時(花押)

高野山千手院

理性院良祐參

七七 知足院惠遍坊舍賣券

永代賣渡申愛染坊舍之事、

米合參拾石也、

此屋敷之四方書者、前之沽券候、相添渡し申候、右現米參拾石ニ賣渡し申候所實正明鏡也、惠雄位牌之茶湯懈怠有間敷候、爲其大師明神不

他方へ賣ル時
ハ本錢ニ賣ル
ベシ

舊學侶方一派文書

七〇

動并佛具其外道具渡し申候、若他方へ御賣候は本錢ニ可有御賣候、無
左様候へハ茶湯續き不申候、仍後日之證文如件、

慶長拾七年壬子拾一月十日

知足院惠遍(花押)

口入金光院

理性院隱居

良祐さま參

七八 愛染院良祐置文

愛染院ユツリ狀書置申分候事、

- 一 愛染明王
- 一 不動明王 二ふく、
- 一 大師 (眞カ) 親如親王 一ふく、
- 一 明神 一ふく、
- 一 荒神 一ふく、
- 一 天神 一ふく、
- 一 佛具 一面 上々、 打ならし大一ツ、
- 一 兩界 一ふく、

- 一 ニヨ鉢
- 一 味增桶 (増) 大小二ツ、
- 一 長遺 (櫃) 一サヲ、
- 一 一夜ギ面赤 (カラカ) キノ、
- 一 虚カサ 一本、
- 一 一トシ 一ツ、
- 一 一マケン 一ツ、 一米カ (ラ) ロト、
- 一 クワンスニツ、 一〇 大小 五ツズツ、
- 一 マケン 一ツ、 一米カ (ラ) ロト、

元和五年十二月十五日

愛染院 阿闍梨良祐(花押)

理性院之内

秀全房參

理性院へ隱居方分書置申分ハ、此一紙之通りにてすまし申候、其外先
年寺町新介殿寄進候寺、良祐分と被遊候一筆御入候、爲其ニ今度號櫻
本として一字建立申書置ヲ一紙代置申間、其分御心得にて制愛染院脇
坊として書置之候、御立あるへき者也、

舊學侶方一派文書

七一

七九 愛染院良祐^カ 遺狀

遺物銀子配分之覺

- 拾貫目 理性院仁永代付置候、
- 四貫目 スム、 萬勝院仁永代付置候、
- 五百目 スム、 延壽院 淳堯房、
- 四百目 濟、 同院 是ハ秀全預リ分ノ銀子、
理性院より可渡分ニ相定候、
- 貳貫目 過半スム可有算用、 堯性房
- 貳貫目 スム、 文朝房
- 五百目 スム、 光明寺正音房
- 百目 スム、 中之坊仔昌房
- 貳百目 スム、 長賢へ
- 參百目 御銀共ニ、 正春へ
- 參百目 万介へ

- 貳百目 スム、 虎へ
- 貳百目 スム、 三藏へ

虎、三藏二人ノ事ハ、我等死去つて後壹年奉公をさせ、銀子を渡し障をも可出者也、以上、

- 百貳十日 日杯之料 定光院 濟、
- 八十六匁 引導之施物 濟、
- 百貳十日 月杯之料 東寶院 濟、
- 五百目 スム、 西院 密藏院
- 貳百目 スム、 妙雲院堯仙房
- 百目 スム、 万勝院春養へ
- 五十匁 スム、 愛染院良識へ
- 五十匁 スム、 杉本ノ淨意坊へ
- 參百目 スム、 さかい御龜へ

都合貳拾貳貫貳百廿六匁也、

右無相違可有支配之狀如件、

寬永十三年

十月吉日

□ (愛染院良祐力)

快春房
秀全房 兩處

〔寶城院文書第一〕

八〇 僧澄釵堂敷地寄進狀

(端裏書)〔成佛院文書〕

谷上成佛院ノ御堂跡ノ地

寄進申高野山谷上成佛院之御堂之跡地事、
右件在所者、賢勝房澄釵、相傳之處也、然而正智院々主實乘房快雅、無
難者依有競望、彌勒院之院家仁、限永代寄進申處、實正明白也、若捧古

彌勒院ニ寄進

文書等稱相傳、於致違亂輩者、可被處盜罪、仍後日新券文之狀如件、

應永卅一年三月廿一日

澄 釵(花押)



八一 前大僧正長任讓狀寫

(端裏書)〔寫〕

讓與 高野山無量壽院之院家、院領、聖教、道具、家具、資財等事、
悉以堯智房所令讓與也、仍爲後日之狀如件、

文明十五年三月廿一日

前大僧正法印大和尚位長任(花押)

八二 彌勒院隆算敷地讓狀寫

永代讓渡成佛院敷地之事、

舊學侶方一派文書

合壹字

右件之敷地者、隆算禪慶坊師資相傳之處、實正明白也、雖然、元知善識房、依爲師弟之契約、讓處明鏡也、彌勒院代々、^(五)牙に不可有等閑者也、先年雖認文書、學侶ノ一札引失候間、重而文書ヲ力キ渡申處明白也、後日ニ號本文書有人者、可爲盜賊者也、次水ノ路者、成佛院之家之外可通者也、後日之證文之狀如件、

水ノ路

文龜三年癸亥二月十二日

彌勒院
隆

算在判

八三 法印良清遺狀寫

(端裏書)「寫」

讓與 高野山無量壽院之院家、院領、聖教、道具、家具、資財、山等事、悉以快譽泉宗房所令讓與也、仍爲後日之狀如件、

大永三年癸未六月廿一日

法印權大僧都良清(花押)

八四 深堯房遺狀寫

(端裏書)「寫」

讓與 高野山無量壽院之院家、院領、山等、本尊、聖教、道具、家具等、悉以所令讓與海辨教任房仁分明也、不可有他之妨者也、仍後日證文如件、

天文十六年潤七月七日

快義深堯房
證人 穎仁榮識房

八五 式部公檀那職賣券

檀那職ヲ賣ル

永代賣渡申旦那識之事、^(職、以下同ジ)

舊學侶方一派文書

合苦井田畑村、市場村、

右件之旦那職者、雖爲我等先祖之旦那職、隆勢方へ、現米貳石仁賣渡申所實正也、然上者、於子々孫々、違亂煩申間敷候、仍爲後日、永代沽券狀如件、

天正八年十月廿六日

式部公(花押)

隆勢參

式部公

八六 前檢校快慶遺狀寫

讓與 高野山無量壽院々家、院領、聖教、道具、家具、資財、本尊并内山等、悉行昌琛堯房、限永代、讓渡申處、明鏡也、

文祿二年癸巳六月七日

前檢校法印快慶(花押)

八七 金剛院宥仙坊舍讓狀

金剛院坊舍

金剛院之坊舍讓置事、

一金剛院之坊跡讓置上者、諸事成佛院之任異見、院家相續、分別可爲肝要事、

一世間出世之道具、其方讓置上者、他人之不可有競望事、

文祿五年

六月廿八日

金剛院宥仙(花押)

少納言宥盛まいる

少納言宥盛

八八 彌勒院正運坊跡讓狀

寶仙院坊跡

讓渡寶仙院坊跡事、

右坊舍者、賢澄房下國之砌、我等ニ借錢之日記、渡寺役以下、坊舍并老僧事迄、相賴候由申候之間、愚僧其扮苦勞仕候、剩先師任雅死去ノ

舊學侶方一派文書

七九

憑子ノ糟
七石ノ院領

刻、賢澄何様我等ヲ見捨、他國仕候上者、某ヲ偏ニ頼由申候、取置已下仕候事、弟子近付衆被存候、然處ニ、借物事外相積候間、貴所ノ現米六拾石、又拾貳石、馮子之糟、都合七拾貳石、慥ニ請取、借物等扮致候、就其坊舍并七石之院領、少々道具相添、金剛院賢秀房へ永代相渡申候、此上者、彌勒院、寶仙坊跡事へ、前々如筋目、可申合候、如此一番最渡上者、就坊舍、他之違亂有之間敷候者也、仍後日證文如件、

慶長七年壬寅八月七日

彌勒院
正 運(花押)

金剛院賢秀房まいる

八九 寶仙院隆仙坊舍讓狀

金剛院坊舍之事、我等寶仙院江就罷渡、跡之坊舍、院領共、行尊房江讓進候、然者、依有要用、現米三十石請取申候、以來先師宥仙之朝暮廻向并年忌等、被成候而可給候、即自蓮福院賣檢添進候、仍後日證文

如件、

慶長七年壬寅年八月十四日

寶仙院
隆仙(花押)
口入蓮金院
全 秀(花押)

行尊房參

九〇 寶山院隆圓坊舍屋敷請借狀

寶山院坊舍餘りに及大破候條、立なをし候ニ付而、如御存知之、屋敷四方詰り候故、貴院之張道へ、壹尺出申候、古坊之雨落、今之坊之雨落へ、一尺出申候事實正也、是ハ貴院と間之故、御無心申事候、我等一代之間、御借被成久之由、以左京御理り申候之處、則御合點忝候、何時成共、其方次第ニ返進可申候者也、仍後日證文如件、

慶長十七年三月五日

寶山院
隆圓(花押)

成佛院様まいる

右之一尺之道江出申^{ヲテ}雨中處、又かんしよの通り、西江七寸出申候、我等一代備り申處實正也、

慶長十九年八月廿一日

寶山院玄永(花押)

九一 寶山院玄永坊舍買券

寶山院坊舍之事、從成佛院隆圓、現米百石ニ買申處實正明鏡也、然上成佛院與我等壹代之間、遺跡罷成候、萬事申合、可得御意候、仍後日證文如件、

慶長十九年九月十日

寶山院玄永(花押)

成佛院まいる

九二 寶山院快玄坊舍屋敷請借狀

寶山院一字、從前々、貴院之爲由緒上、殊更先師其方を念比ニ被置頼

厠

之間、於我等、少も如在不可有之候、其上、自然余院江移候者、後住之事相談申可相定候、就中厠之儀、其院之領地江出申候付、先師一代と書物御座候へ共、又我等一代頼置申候、後代之儀者、御分別次第二候、仍而後日之證文如件、

元和九年六月朔日

寶山院
快

玄(花押)

成佛院まいる

一又坊舍モ其院領内へ一尺出申候所實正也、我等一代借申者也、

快 玄(花押)

九三 寶山院長算請狀

寶山院之儀者、其方様遺所之由承候、左様御座候、我等儀ハ、向後世出世付、萬事御異見次第二仕へ候間、無御隔心、可然様ニ、御異見奉頼候、爲其一筆如此候、仍如件、

元和拾年二月十四日

成佛院様參

寶山院

長

算(花押)

河屋

(廁)河屋、あまたれよりそとへ出候分ハ、普門院被渡候ハ、切せ可申候、就其、右之書物にハ、廁の儀入不申候、若延引候ハ、右之書物書入可申候間、其御分別御尤ニ候、

二月十四日

朝源玄昌(花押)

〔寶城院文書第二〕

九四 堯盛房覺雄請狀案

端裏書「御請狀草安」

(端書)「東夷將軍御墨印御請狀寫

遍明院第三拾八代時住持覺雄堯盛房書之艸安」

今度爲眞言佛法興隆、被仰下御法度之旨、謹諸衆一同奉領掌候、然上

者、慎上意之刑罰、任冥道之治擯、即奉讓高祖大師、兩所權現、兩界諸尊外金剛部等、滿山時々番々護法善神之冥慮冥見、永代守此旨、來際不可奉違背、仍爲後日連署之狀如件、

慶長十五年正月十一日

御朱印御請狀、

九五 無量壽院行昌置文案

(端裏書)「寫」

抑當院者、深覺阿闍梨開基、牧四郎左衛門入道殿建立也、本堂彌陀三尊、尺迦堂尺迦之三尊、本尊者金大日、脇士尺迦、藥師也、予尺迦堂欲企再興砌、被支病患空過了、持佛堂者、御影堂之由緒也、依之、水鏡之御影預置者也、持佛堂_モ御影堂構也、塔者御社之本地也云云、茲故下操之時_モ、御社十六人取之、其次、此塔三人取之也、本尊雖多、大

無量壽院ハ深
覺阿闍梨ノ開
基
牧田四郎左衛
門入道ノ建立
水鏡ノ御影

後住ハ圖ニテ
定ム

黑天秘藏也、傳教大師之作也、地藏ハ大師御作也、聖天ハハクチ聖天
ト號シ、一段秘藏也、護摩堂不動者、智證之作也、地藏者、春日之作
也、御影者、予寄進也、就中當院後住之事、種々雖廻賢慮、不能分別
之間、於本尊光德之前、取鬪候へハ、多聞院長海琛宣房仁下候間、任
神天如此候、偏遍照光院頼存候、世出世御異見候而可給候、仍後日之
狀件(如脱カ)

慶長拾五季三月廿一日

无量壽院
行

昌(花押)

九六 阿闍梨長海印信

大法師覺雄

授印可

金剛界 大率都婆印 普賢一字明

歸命 ㊦

胎藏界 外縛五鈷印、満足一切智々五字明、

㊦

右於金剛峯寺無量壽院、授兩部印可畢、

元和四年戊午十二月廿四日

傳授阿闍梨權大僧都長海(花押)

傳授阿闍梨長
海

九七 阿闍梨長海印信

傳燈大法師覺雄

授印可

金剛界 大率都婆印 普賢一字明

歸命 ㊦

金剛名號

舊學侶方一派文書

胎藏界 外縛五鈷印、滿足一切智々五字明、

孔(丁)衣(疋)

金剛名號

右於金剛峯寺無量壽院道場、授兩部傳法灌頂畢、

元和四年^{戊午}十二月廿四日

傳法阿闍梨權大僧都長海(花押)

九八 阿闍梨長海印信

授與傳法灌頂阿闍梨職位事、

昔大日如來、開大悲胎藏、金剛秘密兩部界會、授金剛薩埵、金剛薩埵數百歲之後、授龍猛菩薩、如是傳金剛秘密之道、吾祖師根本阿闍梨弘法大師、既八葉焉、今愚身第三十七代大悲胎藏第三十六葉傳授次第、師資 血脉相承明鏡也、小僧數年之間、盡求法之誠、幸蒙先師法印灌

頂印可、爰覺雄、深信三秘密奧、專學兩部之大法、今機緣相催、所授傳法灌頂之密印也、爲次後阿闍梨、爲示後哲記而授之、能洗五塵之染、可期八葉之蓮、是則酬佛恩、答師德、吾願如此、不可餘念耳、

元和四年^{戊午}十一月廿四日 傳法大法師覺雄

傳授阿闍梨權大僧都長海(花押)

九九 無量壽院覺雄門主職讓狀

傳燈闍梨覺雄言、抑當院者、代々名匠居住之所、當山佛法相續之場也、寬永之初、先師大阿闍梨長海法印奄化之砌、有妨讓狀者、奉訴殿下、于時大相國秀忠公、可任讓狀旨、有御下知、致妨害者及六人被處遠流、于覺雄門主職被下了、是皆思召佛法之相續故也、自爾以來、爲天下泰平、四海安寧、御子孫繁榮、每朝御祈禱之護摩、怨家退治之修供、永々可勿懈怠、是擬報大相國樣之御鴻恩者也、今雖門第多、依爲器量、

徳川秀忠長海
讓狀ノ旨ニ任
セテ覺雄ニ無
量壽院門主職
ヲ嗣ガシム

寶聚院行通門
主職ヲ讓ラル

舊學侶方一派文書

九〇

以門主職寶聚院阿闍梨行遍僧都仁所令讓與也、任事書旨、得殿下御下
知、本尊、聖教并知行、資財、可被相傳之狀如件、

寬永五年^{戊辰}七月十六日 無量壽院法印覺雄(花押)

右所令相傳代々先德印信、血脈、讓狀十一通相添了、

一〇〇 無量壽院覺雄門主職讓狀

無量壽院門主
職ヲ讓ラル

讓渡高野山無量壽院門主職之事、

本尊、聖教、代々先德自筆書籍、不殘一帖、并諸道具等、遍明院行
遍仁讓與之、

右當院、先師法印長海代々書籍相添讓狀、^(秀忠)愚僧仁被讓渡處、門中少々與
徒黨覃違亂、然處、前一品大相國台德院殿御時、於江戸御城、双方被
召出、御直被聞召對決、讓狀明鏡之上、愚老被補門主、剩及違亂徒黨五
人、被處遠流、自爾以往、治山中无事了、其御厚恩依叵報、奉爲每朝

讓狀ニ違背ノ
徒遠流セラル

天下泰平、御武運長久之懇祈、於塔内別而建壇所奉祈也、自今以後、
永々不可退轉、此條至師孝道也、書置處、任先例如斯不私、此趣天下
御奉行所申上、永可令住持狀如件、

寬永十二年二月十三日

檢校二百廿五世法印大和尚位覺雄(花押)

一〇一 無量壽院覺雄印信

(包紙)「無量壽院大事 行遍」

(端裏書)「當院々家不出大事」

無量壽院々家大事印明

先合掌

誦^升開二風誦^升開二火誦^下開二水

次誦^合二水誦^合二火誦^升合二風

無量壽院々家
大事印明

舊學侶方一派文書

九一

以佛金蓮三部爲口舌脣三内、是無量壽佛之内證也、院務之外輒不可傳授也、穴賢云云、

寬永十二年乙亥二月十五日

授與行遍大法師畢、

傳燈大阿闍梨前檢校法印大和尚位覺雄(花押)

行遍

一〇二 無量壽院覺雄遺物處分覺書

御弟子衆へ遺物杯之覺、高野下向之前ニ書置候と存候得共、忘申候故、助筆ニ而申付候、

一庵室、寺之儀、養子寶泉院ニ申渡候、

一小脇指女房之、同色小袖 御兒へ

一銀子壹貫目同小袖壹ツ、處分ニ有リ 堯秀へ

一大判壹枚小袖壹ツ 恭覺へ

無量壽院覺雄遺物

一志賀おは、一期之内、下女共ニ無量壽院猶可有之者也、尙小袖壹ツ、

一金子參兩是ハ前ニ合力有リ 堯印

一銀子五百目ハ小寺之代遣ス 堯順へ

一同五百目ハ小寺之代ニ遣ス 昌識へ

一金子三兩小寺共ニ 堯叟へ

一同三兩ハ 三左へ

一同貳兩ハ 熊之助へ

一銀子三枚ハ 西寶院へ

一同三枚ハ 來迎院へ

一同貳枚ハ 丹生院へ

一金子壹兩ハ 引攝院へ

一銀貳十匁ハ 福壽院へ

一同十匁ハ 正藏院へ

光壽院へ

一同十匁ハ
 一同五十匁ハ
 一銀十匁ハ
 一金子壹歩ハ
 一銀子拾匁ハ
 一同拾匁ハ
 一同拾匁ハ
 一金壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ

德壽院ハ
 玄秀ハ
 久藏ハ
 九之助ハ
 良有ハ
 長九郎ハ
 文殊院ハ
 東光院ハ
 金□坊ハ
 甚色坊ハ
 金剛院ハ
 良深坊ハ
 玄榮坊ハ
 覺任坊ハ

一同壹兩ハ
 一すゝし大のがや、是ハ前々約束了、
 一白米五斗ハ時米、

正勸坊ハ
 寶壽院ハ
 宗深坊ハ

一本尊ハ壹服ハ
 一金壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ
 一同壹歩ハ

寶性院ハ
 多聞院ハ
 西禪院ハ
 普門院ハ
 三藏院ハ
 高性院ハ
 大乘院ハ
 龍光院ハ
 普賢院ハ
 方福院ハ

一 同壹歩ハ
 一 同壹歩ハ
 一 同壹歩ハ
 一 小袖壹ツハ
 一 小袖壹ツハ
 一 小袖壹ツハ
 一 絹貳疋ハ
 一 小袖壹ツ
 一 古せと一ツ
 一 くりく 硯箱一ツ
 一 乘物刀一腰
 一 遍明院ノ物之本、諸道具已下、一物も不殘尋出シ、遍院へ返シ可申者也、
 右此等之趣、兩人以相談ヲ、相調可申者也、仍而狀如件、
 寬永拾貳年五月十七日
 無量壽院覺雄(花押)

遍照光院へ
 相應院へ
 圓福院へ
 明王院へ
 成福院へ
 高室院へ
 正智院へ
 清淨心院へ
 松平肥前殿へ
 大部屋へ
 竹中是三子へ

寶泉院
丹生院

〔寶城院文書第三〕

一〇三 古今和歌集紹巴奧書

本奥書云
 此集家々所稱、雖說々多、且任師說、又加了、見爲備後學之證本、不顧老眼之不堪手、自書之、近代僻案之好士、以書生之失錯、稱有識之秘本、可謂道之魔姓、(性)不可用之、但如此用捨、只可隨其身之所好、不可存自他之差別、志同者可隨之、

貞應二年七月廿二日 癸亥

戶部尙書藤御判

同廿八日令讀合訖、書入落字畢、
傳于嫡孫可爲將來之證本、

岩山尙書筆
毛利元康所持
本ニ依ル

此八代集者、岩山尙書道賢舍弟、一筆、藝州毛利大藏大輔元康御所持也、可謂證本而已、

紹巴

天正十八年孟冬上旬

法橋紹巴(花押)

一〇四 拾遺和歌集紹巴奥書

拾遺和歌集奥書

天福元年仲秋中旬、以七旬有餘之盲目、重以愚本書之、八ケ日終功、爲授鍾愛姬也、翌日令讀合畢、此集世々所傳、無指證本、仍以數多舊本校合、彼是取其要、猶非無不審、又予合抄之證本、

抄歌五百九十四首歟
二百卅五首下 三百十九首

其中 戀上

中納言師氏

思ひつゝへにける年をさるへにてなれぬる物は心なりけり

題しらす

赤染衛門

我やとの松はさるしもなかりけり松むらならは尋ねきなまこ

此二首集ニ不見歌也、

五百九十二首集抄無相違、

拾遺抄歌

春五十七首

夏卅二首

穉四十九首

冬卅二首

賀三十一首

別卅四首

戀上七十五首

戀下七十五首

雜上百廿二首

雜下八十六首

已上五百九十四首

文應元年七月祧(詠)或人書寫畢、本先人御自筆也、

華山院御自撰、

華山院御自撰
桑門融覺

桑門融覺在判

此八代集者、岩山尙書道賢舍弟、一筆、藝州毛利大藏大輔元康御所持也、可謂證本而已、

天正十八年孟冬中旬

法橋紹巴(花押)

一〇五 新古今和歌集紹巴奧書

此八代集者、岩山戶部尙書一筆、藝州毛利大藏大輔元康御所持也、可謂證本而已、

天正十八年初冬中旬

法橋紹巴(花押)

一〇六 後拾遺和歌集紹巴奧書

此八代集者、岩山戶部尙書之一筆、藝州毛利大藏大輔元康御所持也、可

新古今和歌集
奧書

後拾遺和歌集
奧書

謂證本而已、

天正十八年稔初冬中旬

法橋紹巴(花押)

一〇七 後撰和歌集紹巴奧書

此八代集者、岩山戶部尙書一筆、藝州毛利大藏大輔元康御所持也、可謂證本而已、

天正十八年初冬中旬

法橋紹巴(花押)

一〇八 金葉和歌集紹巴奧書

此八代集者、岩山道賢舍弟尙書一筆、藝州毛利大藏大輔元康御所持也、可

金葉和歌集奧
書

後撰和歌集奧
書

謂證本而已、

天正十八年孟冬中旬

法橋紹巴(花押)

一〇九 千載和歌集紹巴奧書

千載和歌集奧書

此八代集者、岩山尙書道賢舍弟、一筆、藝州毛利大藏大輔元康御所持也、可謂證本而已、

天正十八年初冬中旬

法橋紹巴(花押)

一一〇 詞華和歌集紹巴奧書

詞華和歌集奧書

此八代集者、岩山戶部尙書一筆、藝州毛利大藏大輔元康御所持也、可謂證本而已、

天正十八年初冬中旬

法橋紹巴(花押)

〔蓮金院文書〕 正智院所藏

一一一 島津家久書狀

猶以雖輕少候、段子二端進入候、書信之禮迄候、

爲一字建立、去春以來成(頼眞)正院差上候處、新地就無之、蓮金院被成御渡、

永々爲當家之寺相定之由、悉皆御芳情迄候、彌向後相續候様、滿山衆

徒中被仰合、御入魂所仰候、恐々謹言、

羽柴陸奥守

家久(花押)

(慶長十二年カ)
菊月廿四日

蓮金院玉机下

綴子
島津家久高野
山ニ一宇建立
ノ爲メ成正院
頼眞ヲ登山セ
シム
新地無キニ依
リ蓮金院ヲ島
津氏ノ寺トス
久 羽柴陸奥守家

一一二 島津義弘・同家久連署蓮金院修復記

修復高野山蓮金院記

紀州高野山金剛峯寺者、眞言秘密之道場而佛法最上之靈境也、沙彌惟新少將家久景仰之餘、素欲創一字之梵刹、以爲未來宿因善根、因茲、令成正院島津惟新同家久高野山ニ一寺ヲ創メントス賴眞、遙上其山、以擇其地、雖曰山之高野之曠、有數千餘員之僧房、以故無可挿草之地、賴眞可奈之何哉、於斯之時、寶生院大僧正政遍、爲一山之檢校、檢校感我歸依之志也、相攸於蓮金之院、欲改之一新、以爲我寺、々地雖寸、其價直百千兩金、於是、以檢校之命、告主於蓮金者、買其院之地、以三千兩白銀、然後如渡得船如暗得灯、即勵土木之功、命匠氏之有棟梁材者、以創建數間新寺矣、曩昔釋尊出世之後、有須達長者、擇地而布八十頃黃金、以草創祇園(祇)之寺、爾來震旦、扶桑創建精舍者、無州無處而不有之矣、我之於須達、其富之大小雖不同、而歸依之志豈復有淺深乎、仰冀、彼一院與山齊其高、與水度其長、爲

島津惟新同家久高野山ニ一寺ヲ創メントス
成正院賴眞ヲシテ其地ヲ擇バシム
檢校寶生院政遍ノ斡旋ニ依テ蓮金院ヲ改修ス

我島津氏之寺、永不退轉、假使雖有亂劇之及於斯山、檢校與我金石之約、何敢違之乎、且復住於此院者、至盡未來際、無長無少、學侶之續挑法燈者可也、件々書以告於闔山之學侶、々々亦勿違失之幸也、

慶長十三年戊申十月初四日

前陸奧守嶋津少將家久(花押)

前薩隅日三州太守嶋津沙彌惟新(花押)

蓮金院 法座下

一一三 寶性院政遍書狀案

去三月廿一日、成正院主賴眞僧都、持修復蓮金院記來告曰、此是前薩隅日三州太守島津沙彌惟新老與前陸奧太守島津羽林次將家久公二翁之連署、一院之懸記也、垂之萬世、不容易矣、從有是命、恭披閱之、語高而旨深、雖不能通曉、預約師檀於金石、金石宿因不可不

前陸奧守島津少將家久
前薩隅日三州太守島津沙彌惟新

蓮金院ハ金剛
峯寺ノ別院

源賴朝ノ草創

賴朝ハ島津氏
ノ先ナリ

思焉、熟思惟、金之爲用也、轉萬象而不變也、石之爲德也、經億劫而不磷矣、予佛法久住之檀越于茲足矣、抑吾金剛峯寺之別院蓮金精舍者、自然地景也、沂水之流、傍谷之上、右山也左路也、前神祠也後僧庵也、囉譏明王之結界、功德天女之鎮寺也、遙尋洪基、爲前征夷將軍賴朝卿草創、而明哲練行之勝地、佛經安置之古跡也、以故、東關鎮西之知識、无不脫屣於此砌下、无不濕衣於此門派、頗滿寺之靈室也、豈非一山之傑出乎、雖爾、偷數百星霜、椽椳稍差脫、梁棟屢傾斜矣、或曰、征東夷大將軍源賴朝卿者、島津氏之先也、修之復古可乎、答曰、可也、古往今來、如合符何乎、言已不拘價大小、買得而卽爲公之有者也、地界四至在別紙、價直員數如御記、爾來匠氏運斤成風而、賴眞創功、從者薙草、殿堂門廡之營構、夏涼冬雪之圖樣、莫太之工巧、不日而成焉、加之、雖曰東西數里、山長水遠、舟而發、馱而發、着攝陽入南紀、二世之資財、眞俗之什物、此院寄附、不可勝計者也、末代之住持、不可不知乎、自今已後、於此院者、宜令學業功成者現住

彌久彌昌、永代爲島津氏之護持之旨、達高聞者、ナリ、不宜謹言、

慶長十四年己酉七月九日

寶性院法印政遍

前陸奥守嶋津少將殿

前薩隅日三州太守嶋津維新

一一四 島津義弘書狀

猶々段子一端令進覽之候、誠輕微之至候へ共、補書信計候、其後者不申通、心外之至候、然者蓮金院造營之刻者、其方別而爲被入御精由候、誠御辛勞之儀、一入畏存候、蓮金院爲見廻、堀小左衛門尉指上候間、企一書候、委細用口上候條、不能詳候、恐惶謹言、

羽柴兵庫入

(慶長十四年カ)
二月廿日

惟新(花押)

萬勝院 御同宿中

舊學侶方一派文書

蓮金院造營ニ
助力ス

羽柴兵庫入道
惟新

一一五 島津家久書狀

今度建立之院家へ、衲之袈裟五帖令寄進候、慥被御覽置、滿山大法事之時分者、可被爲着用事可爲本懷候、必非爲一院耳候、次屏風一雙、孔子一生之圖御座候、此本者、從唐舊年相渡、當家へ持傳候處、從將軍樣御所望之由依有之、致進獻刻、爲可相殘後代雖寫置候、別而寄進候、可稀于他候歟、猶付成正院舌頭令省略候、恐懼不宣、

島津陸奥守

三月廿五日

家久(花押)

青巖寺 御同宿中

家久青巖寺ニ
衲ノ袈裟五帖
ヲ寄進ス
孔子一生ノ圖
屏風一雙
唐渡ノ模本

青巖寺

一一六 島津義弘・同家久連署書狀

(懸紙)
俊長房玉床下
鳴津兵庫入道
同 陸奥守
惟新

寶性院政通入
寂

俊長房蓮金院
住持職ノコト
ヲ島津家ニハ
カル

遙久絶音問候處、預芳書、再三披閱、本望存候、仍寶性院就被成逝去、(政通)
早々御使僧被差下、彼御書置到來、令細誦候、然者蓮金院住持職之儀、永々代々於不義不學之人者、不可有相續之旨、誠御宗門之切嗟、感入候、殊貴僧可有住持之由、遺書明白候條、無御辭退御入寺可致満足候、猶委曲御使僧讓演說、不能詳候、恐々謹言、

鳴津陸奥守

七月廿五日

家久(花押)

鳴津兵庫入道

惟新(花押)

俊長房玉床下

一一七 島津久元・伊勢貞昌連署書狀

以上、

島津光久家督
ノ祝儀
俊長房薩摩國
ニ下向ス

今度薩摩守家督之祝儀并蓮金院へ住被成候御祝儀、彼是爲可被仰、此方迄御下向、御太儀之至ニ候、然者蓮金院儀者、永々薩摩之可爲宿坊旨、前中納言家久書物慥御座候上者、若從脇口能雖被申方有之、少も不可有御氣遣候、猶以當家督之儀ニ候間、重而薩摩守書物被仕候様、可申調候、尙期後展之時候、恐惶謹言、

伊勢兵部少輔
貞昌

伊勢兵部少輔

(元和元年カ)
九月朔日

貞昌(花押)

島津下野守久元

嶋津下野守

久元(花押)

蓮金院玉床下

一一八 島津久元外三名連署宿坊證文

島津氏ノ宿坊
廻向院

(島津光久)
薩摩守從分國中、

(高野山參カ)
□□□□

詣之衆、一節廻向院へ雖相着候、先年大坂

廻向院大坂ニ
籠城ス
宿坊ヲ蓮金院
ニ改ム

亂時分、廻向院大坂へ就籠城候、對將軍様依爲逆心、改宿坊、蓮金院へ可相着由被定置候間、彌以不可有異儀候、若背此旨、(者於カ)□□有之者、從貴寺(被記カ)□□置、此方へ可被仰(開候カ)□□(爲其カ)一書如斯候、恐惶謹言、

(元和元年)

□月廿八日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

比志嶋宮内少輔

國隆(花押)

喜入攝津守

忠政(花押)

嶋津下野守

久元(花押)

(蓮金カ)
□□院玉床下

喜入攝津守忠政

比志嶋宮内少輔國隆

一一九 島津氏分國中廻文寫

(端裏書)「御分國中へ之廻文之寫」

伊勢熊野愛宕
多賀鞍馬高野
山其外出家
山伏醫者他國
人ノ諸勸進者
鹿兒島ノ引付
鬼利死丹

態申候、仍伊勢、熊野、愛宕、多賀、鞍馬、高野山、其外出家、山伏、醫者、他國人之諸勸進之者、縱從前々之雖爲宿坊、知人、從鹿兒嶋之引付不持候者、鬼利死丹ニ紛、御分國中可致徘徊候間、勸進ニも不入、宿をもかゝ申間敷候、若引付不持者、其所へ參候者、留置、鹿兒嶋へ可申越候、少茂緩於在之者、地頭、噯衆へ、可爲曲事之段、可及其沙汰候、恐々謹言、

(寛永十六年カ)

卯月廿日

三原左衛門佐

鎌田治部少輔

川上因幡守

嶋津彈正大弼

右書狀分、國中、外城一所二一通ツ、被遣候案紙也、

外城

一二〇 大乘院覺雲五指量愛染王修復記

五指量愛染王

弘法大師以谷渡之藤木彫刻之、是故號谷渡愛染、初大師奉進于嵯峨帝皇、其後展轉傳于賴朝卿也、

此御本尊者、雖爲征夷將軍賴朝卿之御持尊、忠久公當國御下向之時、從有御讓以來、御當家代々御讓與所有之靈佛也、依之、信敬異他也、是以、每歲六月朔日、城內於御對面所、延屈於三十五口之僧侶、爲國家安泰、武運長久、令修於十座三洛叉之法、從古昔至于今未曾有怠慢也、雖然、久經星霜、辟手有損壞、故言上中將綱貴公、々卽命于佛工田中孫右衛門令繕修之者也、

元祿第十五龍集壬午卯月十四日

大乘院十八世法印覺雲誌

島津綱貴佛工
ニ命ジテ修復
セシム

五指量愛染明王像

五指量愛染明王像一體自御頭到蓮臺下、以五指量之故、稱五指量、

一一一 島津久貫外四名連署狀

弘法大師一刀三拜之作、

大師依 嗟峨帝勅命、以谷渡藤彫刻被成候ニ付、谷渡愛染與被號候、賴朝卿別而御信仰ニ而、忠久公江御拜領被成、薩州滿家院厚地村江寺を御建立、右之像御安置ニ而、被號平等王院候、夫より御代々御崇敬被遊、寛永十四年、家久公御病中ニ、爲御使者平田清右衛門純正江戶江被差越、光久公江右之像被進候節、御當家代々御相傳名譽之尊像ニ而候間、慥御頂戴被成置、向後別而可有御信仰事、專要ニ候旨、家久公より被仰進候、

右御本尊御家御傳來之御讓物ニ而、護摩所江御安置被成置、大乘院爲格護之條、萬般疎略有之間敷者也、仍如件、

谷渡愛染
源頼朝島津忠久ニ與フ
忠久平等王院ニ安置ス

島津氏護摩所ニ安置ス
大乘院之ヲ格護ス

名越右膳恒渡

名越 右膳

種子島彈正久基

恒 渡(花押)
種子嶋彈正

北郷作左衛門久嘉

久 基(花押)
北郷作左衛門

島津内膳久兵

嶋津内膳

島津内記久貫

久 兵(花押)
嶋津内記

大乘院

久 貫(花押)

〔理性院文書〕 理性院所藏

一一二 龜井家由來

龜井家由來

覺書 於觀音院

尼子氏ハ代々
出雲ノ守護
ニ子伊豫守經
久
義久ノ代ニ至
リテ毛利元就
出雲ニ出陣ス
義久富田城ニ
籠城スルコト
七箇年ニ及ブ
元就ト和ス
新十郎山中鹿
之助ト一味ス
鹿之助ノ高名
移ル

鹿之助因幡ニ

尼子ノ何かし雲州ノ守護タリ、數代雖治雲州ヲ、尼子伊豫守經久の代ニ至テ、振猛威ヲ隣國□□、然所ニ三代ノ後胤義久ノ代ニ當テ、謀亂リニ武勇衰たるを見て、毛利元就背下知ニのミならず、出雲の國に出陣し、國中ヲ押領シテ、尼子富田ニ籠城スル事七ケ年ニ及、終ニ元就ニ和ヲ請フテ、尼子ノ何かし、元就ニ附屬ス、湯新十郎ハ孤ト成テ、雲州意宇郡ニ譜代ノ家臣有リ、彼ニ養育せられて有けり、十一歳ニテ、家老共召具シ、山中鹿之助ト一統ス、雖然、新十郎幼少成間、學文ニ志シ、古ノ讓共心かけ、十五歳ヨリハ、行跡譽有、隣國ニ顯ル志ナリ、
一山中鹿之助雲州富田籠城ノ時、富田ノ城下ニテ、毛利家の兵狼之助ト云大剛者ト、河中ニテクンテ、頸ヲ取、此外度々ノ高名雖有之、略之、
一山中鹿之助雲州ヲ他國シ、因幡國ニ在ける同國八上郡ノ内矢部ト云者ニ、武勇隣國ニ

新十郎矢部某
ヲ切臥ス

鹿之助ノ掣ト
成ル

鹿之助ノ妻ハ
龜井能登守ノ
女

新十郎龜井ヲ
名乗ル

鹿之助織田信
長ニ通ズ

丹波靱井ニテ
信長ノ扶持ヲ
受ケ明智光秀
ニ附ク

大和志貴城攻

無隱者ナリ、鹿之助ニ雖一味スト、心底ニ依有逆心、構虛病、鹿之助ニも不對面、比ハ天正二年初夏ノ事也、因茲、矢部所へ新十郎ヲ遣候へハ、病中ニ而候へ共、可懸御目トて、對面之所、内々鹿之助申含候故、新十郎矢部ヲ切臥申候、然所ニ、矢部カ老等、新十郎ヲ後ヨリ切候ヲ、飛違則座ニ貳人切臥候、新十郎十八ニテノ事也、無比類手柄之段、鹿之助ハ不申及、家老下々迄感候、新十郎矢部双方之者貳十人餘討死ス、
一尼子一族之内ニ、新十郎程成者無之と而、山中鹿之助見立テ、天正二年甲戌四月中旬、新十郎ヲ鹿之助掣ニ取ル、爰ニ龜井能登守ト云者、三代以前ニ、紀州ヨリ雲州へ下テ、尼子家ニ致忠儀よつて、尼子家ノ家老ノ長ト成テ、山中鹿之助妻女ハ、龜井能登守娘成によつて、龜井ノ家ヲ相續シテ、龜井ト成、則其名字ヲ讓テ、龜井新十郎ト申也、
一山中鹿之助信長公へ献使者、御一味致度由申上候處、御感に而、則明知日向守ニ相添、丹波國靱井ニテ、三千人ノ御扶持方拜領ス、其節大和國信貴城ヲ、明知日向守ニ被仰付、日向守則時ニ可乗取用意半ニ、丹波ノ靱井ヨリ見廻申候處、則城ヲ可乗取ニ付而、鹿之助、新十郎城へ乗ル、本丸へ上ル時、内ヨリ何者トハ不知、鎧ヲ持、鹿之助ヲ突申所ニ、引ハツシムツトクンテ、岸ヨリ下へ落候時、新十郎追續下合、鹿之助ト兩人シテ討取、明知日向守、右ノ頸實檢之節、生捕之者ヲ傍ニ置、其名字ヲ被尋候處、鹿之助討取候首ハ、川合ト申大剛者ノ頸ニテ候と申、其時日向守、鹿之助ニ向テ被申けるやうハ、何迎

新十郎ノ手柄

信長鹿之助ニ
播磨上月城ヲ
與ヘテ西國ノ
押トナス
毛利輝元上月
城ヲ攻ム

新十郎上月城
ニ入り鹿之助
ニ秀吉ノ旨ヲ
傳ヘントス

若氣の働被仕候哉、鹿之助杯ハ、世ニ無隠人ニテ候ヘハ、命ヲ全シ、國を治候事、肝要
と被申候ヘハ、新十郎居合高名仕候と、鹿之助申候ヘハ、新十郎呼出シ、無比類手柄之
由褒美被申候、

一明知日向守ニ、山陽道筋被仰付候所、丹波一國未治見及、山中鹿之助所ヨリ信長公へ献
使者、羽柴筑前殿ハ、播磨ノ國ヲ治、同國佐用郡之内上月ノ城ヲ、山中鹿之助ニ被下、
西國ノ爲押ト罷有候所ニ、毛利輝元數萬人ニテ押寄、逐日城ノ塀涯より二三間ニ仕寄ヲ
付責ル所ヲ、羽柴筑前殿爲後詰、上月ノ東高倉山ヲ本陣ニ取、先懸之兵者共、於度々ニ
及合戦、筑前殿ヨリ信長公後詰被成候者、筑前殿ハ、美濃ヨリ備中へ廻リ候ハ、毛利輝
元ノ人數敗軍可仕之由、以使者雖仰上と、信長公ノ御家老衆、筑前殿ノ威猛ニ詰、大切
ニ立ン事ヲ猜ンテ、御出馬之儀差留被申ニ付、高倉後詰之御助勢無シ、就其、右之趣城
内山中鹿之助ニ被仰遣度之由、筑前殿龜井新十郎ニ被仰聞候、城中ハ鹿之助切て出候ハ
、筑前殿ハ高倉ヨリ押寄、御引取可被成旨、新十郎ニ被仰聞候、此邊大事之儀に而御
座候間、新十郎參、直ニ鹿之助ニ申含、御意之通ニ可申含候由、申上候ヘハ、新十郎ヲ
遣之、討死仕候ヘハ、信長公ノ御前如何と被仰候、新十郎申様、筑前殿御使と乍申、信
長公御爲之儀に候間、何れノ道にても、御用立候段者、同前之儀ニ御座候間、是非私ニ
被仰付候ヘと、某罷入、鹿之助ニ御意之通申聞せ、首尾相應仕候様ニ、可致相談通、再

新十郎上月城
ニ忍ビ入ル

秀吉新十郎ニ
出雲ヲ與ヘン
コトヲ約ス

三申上候へ者、尤と思召、城中へ御入可有之由被仰、如何成者ヲ召連罷入候半やと、御
尋被成候間、天野十兵衛、高橋孫四郎と申兩人、供ニ召連可罷入通申上候、孫四郎と申
者、若輩者にて候へ共、數度之手柄ヲ仕たる者に而候、又筑前殿被仰候ハ、新十郎ニハ
出雲ノ國ヲ可被遣候間、右兩人之者、度々之忠節仕候由候間、新十郎所ヨリ、領地可被
宛行候へ共、筑前殿ハ先行高百石宛可被遣とて、筑前殿御書判、右兩人へ銘々ニ被下
候、天正六年戊寅六月廿三日ノ夜、龜井新十郎、右之兩人ヲ召連、城中へ忍入ル、其節
筑前殿無御心元思召、新十郎無恙城中へ入候ハ、相圖之火ヲ立候へと、終夜物見番被
仰付、霄二時ハ、平野權平次、夜中二時ハ寺澤忠次郎、曉二時ハ石田佐吉ナリ、相圖之
火ヲ見候へと被仰付、無透間も、相圖之火ハ不立候哉と、御使被遣、筑前殿も不被爲寢、
無御心元思召候處ニ、寺澤忠次郎番丑ノ刻ニ、火を立候ヲ見付、則申上候へ者、筑前殿
御安堵被成候、廿三日之夜忍入、翌日一日鹿之助と談合仕、廿四日ノ夜、又城中ハ忍出、
高倉御本陣へ參、鹿之助所より御返事ヲ申上候ヘハ、上月ノ城中ニ楯籠諸勢、我等壹人
ヲ目懸ケ防戦、侍七百餘人御座候、右之者共社、切腹候トモ、其妻子或者手負、或者病
人ヲ殘置、無躰ニ相果候而、不便之儀御座候間、我等壹人城中に而切腹仕、相殘者共助
可申と覺悟相極候間、重而ケ様之儀被仰遣間鋪之由、筑前殿へ返事申上候ヘハ、筑前殿、
新十郎手ニ御取付被成、此上者、新十郎出雲ノ國ヲ可被遣候條、左様相心得候へ迎、筑

前殿御落涙被成候、

秀吉新十郎等
ヲシテ因幡鹿
野城ヲ守ラシ
ム
吉川隆久鳥取
城ヲ守ル

一因幡の國鹿野の城ニ、因幡の國侍武田源五郎、丹波國ノ赤井五郎、石見國ノ福屋彦太郎、龜井新十郎、右四人ノ者ヲ、筑前殿ヲ籠被置候、因幡ノ國鳥取ノ城、鹿野ヨリ四里上方、播磨ノ方也、右ノ城ヲ、毛利元就家吉川式部少輔、(隆久)其外因幡侍數拾人、毛利家より取鳥城へ籠置、敵大軍ノ由被及間召、筑前殿無心元思召、天正八年庚寅十月下旬ニ、筑前殿播州姫路ヲ、杉原七郎右衛門、荒木平大夫、神子田半左衛門、其外御旗元衆以上拾三人、(因幡カ)播磨ノ鹿野ノ城ニ籠置ノ四人ノ者、引取候へど御意ニ而、鹿野ノ城ヨリ二里上方、吉岡ト申所迄、右拾三人の衆被罷越、以使者、筑前殿御意之趣被申越候處、右四人ノ内、因幡侍武田源五郎、丹波赤井五郎、石見福屋彦太郎、右三人、任御意、吉岡迄明退、龜井新十郎申様ニハ、西國御先之城被仰付候儀、家ノ面目ト存候所、此城明退申儀、口惜儀に而在之候間、鹿野ノ城に而切腹可仕ト申切、十三人ノ衆へ、吉岡迄使者ヲ進候へハ、去迎ハ、氣特ノ志ト、拾三人ノ衆ヲ、面々持筒貳拾挺、玉藥相添、金子取集拾枚、右ノ使ニ相添、新十郎方へ越被申候、武田、赤井、福屋三人之者共、右之御使拾三人之衆ト同前ニ、播州姫路へ罷上候、

秀吉新十郎等
ヲ姫路ニ召返
サントス

新十郎鹿野城
ヲ死守ス

隆久鹿野城ヲ
攻ム

一因播鹿野ノ城ニ四人居申候武田、赤井、福屋三人ハ、播州へ上リ、新十郎壹人罷留候事、敵則聞届、數千人ノ兵ヲ出シ、日々責ケル所ニ、城中ヨリ切テ出テ、散々合戦ス、其比

新十郎宮吉城
ヲ降ス

ノ習ニヤ有けん、其勢の大將ノ兵二人三人ノ内ニ、懸出シ手柄ヲ盡シ、籠城候間ニ、敵ノ首五ツ、新十郎自身ニ討取、(段脱カ)其外段ノ儀略之、

一鹿野ノ城ヨリ一里北、宮吉ト云所ニ城在リ、是ハ毛利家ヲ、鳥取へ傳候城ナリ、新十郎度々押寄責ケルニヨツテ、籠城モ及難儀、田公新介降人ニ成テ、新十郎ニ屬ス、則宮吉ノ城ヲ破却シテ、鹿野ノ城ニ籠者也、

秀吉備中高松
城ヲ攻ム
明智光秀信長
ヲ殺ス
秀吉輝元ト和
ス

一羽柴筑前殿、山陽道ヲ治、備中高松の城ニ、輝元ヨリ清水ノ何かしヲ爲御將、籠置候所ニ、筑前殿押寄、水責仕、大形責詰候所、明知日向守企逆心、信長公ヲ奉討、則筑前殿被聞届候へハ、清水ノ何かしニ切腹させ、伯州半國、雲州、隱岐、石州、周防、長門、安藝、備後、備中半國ノ國割ニ被成、和睦在テ、筑前殿御上候時、播州姫路ニ一日御逗留ニ而、翌日御出陣之時、床机ニ御腰ヲ掛ケ、諸勢ノ法度ニ被仰付候節、龜井新十郎罷出候へハ、其方ニハ内々出雲國被遣候様にと、信長公へ可被仰上候へ共、雲州ハ今度國割仕、輝元ニ遣候間、何れの國望候哉と、筑前殿被成候ニ付テ、(脱アラン)新十郎申様、今度上方へ御上被成候ハ、六十餘州御手入可申候間、新十郎ニ者、琉球ノ國拜領仕度之由申上候へハ、筑前殿御感に而、團扇ノ表ニ、龜井琉球守ト御書、裏ニ者、秀吉ト被遊御判被成被遣之、ケ様之時城ノ大事ニ存候間、早々居城へ歸、堅固ニ城ヲ持候事、肝要ト被仰、御暇被下、鹿野ノ城へ罷歸候、

新十郎秀吉ノ
天下統一後琉
球ヲ與ヘラレ
ンコトヲ望ム
龜井琉球守
新十郎鹿野城
ニ歸ル

秀吉鳥取城ヲ攻ム

隆久等自殺ス
秀吉新十郎ニ
因幡氣多郡ノ
地ヲ與フ

新十郎肥前名
護屋ニ參陣ス

石火矢
蘇川城籠城

一翌年羽柴筑前殿、播磨姫路ニ御座被成、因幡取鳥ヲ取詰可被成と思食、前ノ年ノ商人共ニ金銀ヲ持せ、取鳥近邊ニ在之食物之類、直段ニかまわす御買被取、明三月ニ御出馬ニ而、大廻リ東南北南ノ山ヲ取巻、西ノ川ヲ外ニナシ、大廻ヲ取巻御責被成候、食絶、人馬ヲ食シ申故、籠城仕事不成、吉川式部少輔、因幡侍道友切腹仕、城中之者御助、因幡取鳥御請取被成、則宮部善條坊ハ被遣候、龜井新十郎因幡喜多郡鹿野ノ城ハ、取鳥ヨリ四里西、堅固ニ持こらゑ候儀、御威在テ、三百枚、河原毛馬ニ鞍被爲置、因幡氣多郡壹萬三千八百石、筑前殿ハ龜井新十郎ニ被遣候、

一北國陣、九州陣、小田原陣何茂相濟、六十餘州羽柴筑前殿御手ニ入、扱高麗陣ト被仰出候刻、右琉球國拜領之訴訟申上、彌可被遣之御朱印被下ニ付テ、雖成小身、琉球望申故、人數三千五百餘引連、肥前那古屋へ參着ス、文祿元年壬辰ノ年、高麗御陣之時、那古屋ニ而、太閤様被仰様に者、琉球ヲ被遣候へ共、高麗ト琉球ト二手ニ人數ヲ被遣、自然理運ニ不成時ハ、高麗迄ノ妨成事候之間、先黒田甲斐守(長政)ト一所ニ、朝鮮都へ可被立之旨に而、黒田甲斐守ト一所ニ參候様に被仰遣候へ共、武藏儀ハ、御斷リ可申上、西高麗へ船ヲ乘申候所ニ、番船數千艘押寄、合戦仕候所ニ、大明石火矢被打立、武藏守船悉焼拂、ソセンノ城ニ引籠、七十餘日逗留ス、ソセンノ城トヨシユノ城トノ間、其遠サ日本道二里、ソセン城ヨリ五里良ノ方ニ、古城ト云城在リ、右ノ城ニ、紀州熊野ノ住人

釜山ニ移ル

東古都城

新宮ト申者楯籠候へ共、新宮ハユモカイへ引取候間、古城へハ武藏守人數ヲ移可然ト通、新宮申越、新宮ハユモカイへ立退申ニ付テ、ソセンノ城ヲ焼拂、小城へ引取、數月持コラエ申内、朝鮮人數度押寄、合戦致候へ共、一度も無越度候、
一小城ノ城ヲ焼拂、釜山海へ可被引取旨、岐阜宰相殿ハ被仰下付、小城ヲ引取候而、釜山海へ罷出候所ニ、七ケ日以後、番船數千艘乘來リ、釜山海の間ノ内へ乘入、石火矢ヲ打合戦ス、諸勢此ヲ見テ、武藏守古城ヲ堅固ニ持候間ハ、番船ヲ押候所ニ、小城ヲ明退候得者、早速番船寄來ト、日本ノ諸侍被申候、西高麗ノ敵、殊ノ外強ク、ユモカイへサシ出ルニ付テ、朝鮮人ノ持タリシナンシユノ城ヲ可責トテ、大名小名十六人押寄候所ニ、一日モ不怵、退出仕候、其後鎮守へ數萬人押寄、則城ヲ乘取ル、其時龜井武藏守久鋪居住シテ焼拂シソセンノ城ヲ見テ、鎮守近キ城ヲ持居申段、去リ辿ハ手柄ト、諸大名衆被申候、

一龜井武藏守小城ハ釜山海へ引取申候へハ、東古都ト申所ニ、岐阜宰相殿者千人餘楯籠候ヲ、朝鮮人數萬人寄來、無透間モ責申候、釜山海へ引取申候事モ不成候間、武藏守古城へ參リ、右之人數引取候へト、岐阜宰相殿ヨリ被仰付候テ、古都へ參候所、朝鮮人數萬人出合候へ共、其勢かまわす近付、敵ヲ拂、古都ノ城ニ入、暫息ヲつかせ、又其夜古都ノ人數ト一所ニ、釜山海へ引取候事、

機張城在城

武藏守機張ニ
テ大虎ヲ獲秀
吉ニ贈ル

西生浦ニテ番
船ヲ乗取ル

ウイナコンヲ
攻落ス

女松平忠清ニ
嫁ス

會津陣ノ時武
藏守逸早ク江
戸ニ下ル

江戸城ニ徳川
家康ニ謁ス

小山ニテ家康
ノ夜咄ノ席ニ
出テ石田三成
ノ奉書ヲ引裂
ク

舊學侶方一派文書

一文祿元年壬辰年、朝鮮クチャンノ城居住仕候儀、釜山海の奉行衆ヨリ被置仰付候、同十月十二日、朝鮮人クチャンノ城へ、數萬人押寄候所ニ、城中ヨリ切テ出、朝鮮人ノ頸八百餘討取、釜山海へもたせ、獄門ニ掛候事、

一朝鮮クチャンヌテ、同年二月廿一日、武藏守狩ヲ仕候節、大キ成虎出候ヲ、武藏守鐵炮にて討つ、不用掛廻リ候所ヲ、重テ打かけ打留ル、勝テ大キ成虎ニ而在之故、腹ヲ拔、

鹽ヲ込、那古屋大閣様へ、牧彦十郎と申者使者ニテ、進上申候へハ、長東大藏、富田左近奏者ニテ、披露在之、大閣様御感ニテ、牧彦十郎御前へ被召出、御道服御手つから被

下候、殊勝タル大ノ虎、日本へ渡候事、初候故、則被備叡覽ニ、洛中ヲ車に而御渡候事、文祿二年一癸巳年、朝鮮をつかひにて、番船壹艘乗取、無比類手柄之由にて、御朱印被下候、于今御座候事、

一同年四月廿四日ニ、ウイナコンノ城、武藏守責落候事、右ノ條々太閣様へ致忠節候へ共、無其甲斐、家康様へ奉頼可申と、内々存、其忠ヲ以、何れ成共御一族之内、武藏守掣ニ被仰付被下候様ニと申上候へ者、松平玄蕃嫡男民部大輔ヲ掣ニ被下、慶長五年庚子三月

中旬ニ、於大坂祝言相調、後年玄蕃頭、
一同年會津景勝陣之時、武藏守何れノ衆(眞先カ)其元ニ江戸へ罷下、江戸町ニ罷在候時、成瀬(正成)隼人、近藤登之助兩人、武藏守所へ見廻被申、上方ノ奉行共、企逆心之由、京、大坂ヨ

リ申來候由ニ候間、明日家康様へ御目見候而可然之由、右兩人被申、就夫、翌日武藏守登城申候へハ、家康様武藏守と御呼被成、上方ノ奉行共、企逆心之由、昨日申來と被仰候へハ、武藏守申上候様ハ、石田治部少輔、(三成)車に而洛中ヲ被曳候ヲ見可申と申上候へハ、ソレハイナ事ヲ申ト、御笑候事、

一小山ニテ上方者相詰候處ニ、武藏守御夜咄ニ罷出度ノ由、本多上野介、(正純)成瀬隼人佐へ申上候へハ、尤之由被仰候而罷出候、懷中ノ上方秀頼奉行ノもの所ノ奉書ヲ下シ申候、其奉書ヲ家康様へ差上候得者、御披見候而、御返シ、其奉書ヲ引さき、懷ニ入申候へハ、夫ハあらけなき事と被仰候へハ、武藏守、此奉書ハ入不申候、人ニより奉書ヲ守リニか

け上リ申者も可有御座と申候へハ、殊外御感被成候事、
一小山殿中ニテ、藤堂佐渡守、(高虎)瀬田道阿彌兩人ヲ御使ニテ、上方衆妻子共在々ニ是迄罷下候儀、御満足ニ被思食候、御暇被遣候間、上方へ罷上候様ニト被仰出候、其時武藏守、兩人ノ御使ヲ呼かけ、是迄罷下候者共、家康様御暇被下候ヲ、忝と申候而、罷上リ候ものヲ者、討果申度と申候へハ、藤堂佐渡守申様ニ者、家康様被仰出候儀候間、何分ニも御請申上候へと申候、其時武藏守申様ニ、それハ人によつて被仰聞候へ、私杯ハ一筋ニ存切御供仕上者、如何様之儀御座候通も、二心有間鋪候由、氣色ヲかへ申ニ付、本多上野介、成瀬隼人佐兩人として、武藏守殿か手ヲ引、奥ノ御座鋪へ、御同心ノ壁一重ニテ、

舊學侶方一派文書

關ヶ原役後因幡伯耆ノ諸城ヲ請取ル

家康様御聞被成、殊之外御感被成候事、一慶長五年庚子、關ヶ原御陣ノ時、武藏守致御供罷上、江州於大津御暇被下、居城へ罷下候、其時因幡一國、東伯耆半國、武藏守請取可申旨被仰付、爲御加勢、小出大和守、別所豊後守、赤松左兵衛右三人也、右之内左兵衛、不忠之子細依在之、因幡鳥取ニテ切腹被仰付、其頸大坂ニ而家康様へ差上候へハ、則大坂京橋獄門ニカケ候事、

關ヶ原役後加増トシテ因幡高草郡ノ内ヲ與ヘラル

一關ヶ原御退治之已後、爲御加増、因幡之國之内高草郡、家康様ハ龜井武藏守へ被下候事、一慶長九年、武藏守子新十郎ヲ、諸大夫ニ被爲成、被任右兵衛督、數年爲御目見之、雖致

子政矩右兵衛佐ニ任ゼラル

登城、同ハ御側ニ、如何様ニも被召仕被下候様ニト、本多上野介、成瀬隼人佐兩人ヲ以、訴訟申上候へハ、翌年乙巳年十月朔日、家康様伏見ハ御下向之時、龜井右兵衛被召連、

政矩徳川秀忠ニ召出サル

江戶へ致御供、同年極月八日ニ、從權現様台徳院様へ右兵衛被召仕候様ニト、被仰渡御座候由ニテ、其趣被爲仰渡候、爲御上使土井大炊頭、嶋田兵四郎、右兵衛督所へ御出候、

豊前守ト號ス

其後右兵衛ヲ改、豊前守ト號、

松平康重ノ女ヲ娶ル

一同十四年己酉四月中旬ニ、龜井豊前守松平周防守掣ニ被仰付、祝言相調候事、

伯耆國ニテ五千石ヲ與ヘラル

一同年伯耆國之内ニテ、知行高五千石、台徳院様ヨリ龜井豊前守致拜領候、

家督ヲ嗣ゲ

一同年九月七日、因幡國高草、氣多兩郡、伯耆國久米川郡之内に而五千石、高合四萬三千石、繼目之御直判、台徳院様ハ龜井豊前守致拜領、

大坂陣ニ出陣ス

一同十九年甲寅、大坂御陣之時、江戶ハ致御供罷上候時、江戶ニ而、銀子百枚致拜領候、則本多佐渡守組ニ被仰付、御後備也、人數一千七百餘人召連出陣仕、大坂岡山に而、金子貳拾五枚拜領仕候事、

元和元年乙卯

一翌年乙卯、大坂御陣之時、四月廿二日、因幡鹿野ノ城ヲ立、伏見ハ御供、本多佐渡守組

城替ヲ命ゼラ

ニ入、御旗元ノ前備也、

レ津和野三本松城ニ住ス

一元和三年、城替被仰付、石州西境之城、津和野三本松ノ城ニ住ス、

政矩京都ニテ死去ス

一元和五年八月十五日、龜井豊前守、於京都死去仕候、法名悟叟淨頓、

茲政跡ヲ嗣ゲ

一同年龜井豊前守跡職無相違、台徳院様ヨリ龜井能登守ニ被下候事、

能登守ニ任ゼラル

一寛永十二年十二月卅日、諸大夫ニ被仰付、被任能登守候事、

〔高室院文書第一〕

一一三三 北條長氏書狀

(懸紙)

〔高室院

長運法印御房

人々御中

○本書ナシ

(北條)

長

氏

」

高室院長運

北條長氏

舊學侶方一派文書

一二四 北條氏政書狀

(懸紙)

「高室院

○本書ナシ

(北條氏) 政

北條氏政

一二五 北條氏舜書狀

(懸紙表)

「謹上 高室院

貴報

平氏舜

北條左衛門大夫氏舜

(同裏)

北條左衛門大夫

○本書ナシ

一二六 大藤政信書狀

(懸紙表)

「拜答 高室院

參御貴報

政信

大藤式部少輔政信

(同裏)

大藤式部少輔

御芳翰之至、具令拜讀候、乃武運長全之有御祈精示預并御土産之兩種、如御來札之到着、目出頂拜仕候、隨而疎布五端、進之候、初尾之料分迄候、此外日牌錢之御請取共、被^掛封御尊意、慥^ニ御座候、然而未進之分者、調次第^ニ渡之進候、定而別紙^ニ注文爲登可申間、不能重意候、委細者御使僧令擔負口舌候、恐惶敬白、

卯月廿二日

政 信(花押)

高室院

參御貴報

一二七 大藤千松書狀

大藤千松

(懸紙表)

「高室院

參尊報

大藤千松

舊學侶方一派文書

日牌錢ノ請取

(同裏)

自相州田原

島 紬

預尊札候、拜披本望至極候、仍土產兩種送給候、目出度存計候、不相替御祈精所仰候、任嘉例鳴袖壹端、令進覽候、委曲御使僧御口上頼入候、此等之趣可得尊意候、恐々敬白、

極月六日

大藤千松

高室院

參尊報

一二八 小笠原康廣書狀

遙久不申達、背本意存候、仍去比預ケ申候鞍、鐙、轡、此者ニ渡可給候、永々差置申、御無心難申盡存候、旁々令期後音之條、不能詳候、恐々謹言、

三月十九日

康 廣(花押)

小笠原播磨入道康廣

(切封ウハ書)

小笠原播入

高室院

御同宿中

康 廣

一二九 澤員盛書狀

澤二郎右衛門尉員盛

(懸紙表)

高室院

御同宿中

員 盛

(同裏)

澤二郎右衛門尉

尚以、是迄御使僧過分至候事候、以上、

御使僧是迄越御申候、殊御芳札、兩種被下候、過分至候、隨而女共月牌御手形、慥請取申候、拙者心中乍恐可有御察候、然者、子ニ候者之爲月牌、金子壹兩、令進候、御六ヶ敷候共、名日ニ御茶湯奉頼候、萬端御使僧御口上頼入候、恐惶謹言、
追啓、兩人位牌下書令進候、

月牌手形

位牌下書

霜月十五日

員 盛(花押)

高室院

御同宿中

一三〇 北條氏郡書狀

金とうろ之儀申上候、然者、於高野山、千疋之分取替頼入候、此段調可給候、以上、

八月朔日

(北條) 氏 郡(花押)

金燈籠
北條新太郎氏
郡

(ウハ書)
「西光院

新太郎

一三一 北條氏規書狀

改年之御慶雖事舊候、(北條氏盛)助五郎以使申入由申事ニ候間、一筆令啓候、内々當春者罷登、積御禮可申入由、覺悟仕候へ共、何やかや取亂申、無

了簡躰ニ御座候故、不罷登候、來六月者、必罷登、積過候儀共、御禮可申達候、仍三種、一荷進覽候、誠表一儀計候、委細者、慶忍口上ニ申含候條、可得尊意候、恐惶敬白、

二月廿四日

北條美濃入道 氏 規(花押)

北條美濃入道 氏規

高室院

人々御中

一三二 北條氏規書狀

尊札拜見、忝存候、仍九月爲御祈念、御護并兩種壹荷、被懸御意候、御護拜領、御樽致賞味候、抑其以後者、久敷無音、誠乍何茂背本意存候、委光三院口上頼入候條、自是可得御意候、恐惶啓白、

九月廿七日

北條美濃入道 氏 規(花押)

光三院

高室院

尊報人々御中

一三三 北條氏盛書狀

爲歲暮之御祝儀、兩種、一荷給置候、珍重ニ存候、明春者、早々從是
可申達候、恐々謹言、

極月廿四日

氏 盛(花押)

北條助五郎氏盛

(ウハ書)
〔高室カ〕
院

北條助五郎氏盛

尊報

一三四 石原安定書狀

以上、

貴札拜見仕候、仍高野之高室院御下山之由候、尤此方へ可申請候へ共、

高室院下山ス

北條氏分國中
出家衆出入法
度

爰元御出家衆出入法度被申付候間、此方へとも不申候て、迷惑仕候、
此等之通、高室院へも御返事申入候、貴老も、可然之様ニ御心得候
て、可被仰越候、猶彼使僧へ申入候、將又貴老へ拙者以參可申入候へ
共、未手透無御座候故、背本意存候、次ニ御内儀さま、女ともかた
へ、早々御音信共過分忝候、此旨奉頼候、恐惶謹言、

石原一左衛門尉

八月廿二日

安定(花押)

石原一左衛門尉
安定

江雪齋參御返報

一三五 澤房滿書狀

猶々、乘眞房令入魂候段、萬事御馳走憑存候、
御貴札令拜見候、仍爰元之儀、雖機遣申候、先以無異儀候之間、可御
心安候、隨而乘眞房被懸御意候、於此方入魂申候、一段祝着至存候、

乘眞房

舊學侶方一派文書

一三五

澤兵部太輔房

委細者、口狀可被申候之條、不能懸筆候、恐々謹言、

澤兵部太輔房 滿(花押)

壬七月廿五日

高室院御報

一三六 石原安定書狀

吉野紙

猶以、拙宿かたへ、吉野帑貳束、被懸御意候、至過分候、態迄鳥目三十疋令進入候、誠ニ一儀迄候、以上、折帑貳恐入候、以上、如御尊書、明春之御慶珍重申納候、然者、御前并御姫君様江、御祈念之御守、殊卷數一合、杉原壹束、被進之候、兼又御姫君様へ御守頂、五明貳本、杉原拾帖、是又何も披露仕候、遠路一入御悅之御事候、委細者、御使僧奉頼申入候、猶永日可得奉御意候、恐惶謹言、

石原一左衛門尉

安(定)(花押)

正月廿一日

高室院尊報

一三七 松田與左書狀

山伏

猶々、此山伏可被申上候、以上、

追而申候、彌七郎殿御仕合、無是非次第候、就夫、中新も、自御陣直登山にて候、定彌七郎殿遠行之儀、具中新可被申候間、委不及申候、中新之事、一節者其御山ニ可有逗留も、可爲御心中候、依夫、此大泉山伏爲迎罷登候之間、いかやうの儀被申候共、貴院御異見候て、御下尤候、若輩口宏成申事候へ共、親所様應根共ニ右之分候間、是非共御進候て、御下候事、乍憚憑存計候、恐惶謹言、

松田與左(花押)

正月十六日

宥任御坊

參 御同宿中

宥任

松田與左

一三八 北條氏正書狀

先月廿二日之御狀、殊御祈念之御札守、被懸御意、忝奉存候、其元御無事之由、珍重存候、當地無事致勤番候間、可御心安候、猶期後音之時候、恐惶敬白、

北條久太郎氏正

六月廿七日

北條久太郎氏正(花押)

高室院様貴報

一三九 北條氏治書狀

先日者、御慇懃之御尋、忝存候、早々御歸候て、不得御意、御殘多存候、然者、明廿四日之朝、御出可被成之由、過分之至、御座候、彌無御多言奉頼候、恐惶謹言、

卯月廿三日

氏治(花押)

北條左京氏治

(切封ウハ書)

高室院様

侍者御中

北條左京氏治

一四〇 北條氏治書狀

猶々、我等氣分御尋、忝存候、今日者、最早能御座候間、可御心安候、以上、貴札令拜見候、如仰、昨朝者御出忝存候、併何之御馳走茂不申入、殘念之至御座候、右之爲御禮、預示御隔心存候、何茂面上之節、萬々可申述候、恐惶謹言、

卯月廿五日

氏治

(切封ウハ書)

高室院様

貴報

北條左京氏治

一四一 蘆川景盛書狀

日牌
過去帳
大藤與七兄女、去歲閏霜月廿三日死去候、彼爲日牌、拾參貫文被進候、其内此度拾貫文進之候、相殘分者、來年上可被申候、仍戒名者、覺了妙智尼與候間、御神妙ニ不斷之御回向被頼入候、過去帳之儀者、芳圓與親子之儀候間、可爲同前候、恐惶敬白、

蘆川左近將監 景盛

十月朔日

蘆川左近將監 景盛(花押)

高室院

參御同宿中

一四二 蘆川景盛書狀

如每年之、御尊墨示預候、委細令拜讀候、仍有御土産五明壹本、并墨貳挺、被下之候、拜領申候、然者、旦那へ御高札、拙夫折節他行故、不能

堯順房

御取合候、雖然、直實被及御報候條、可爲御合點候、隨而、妙庵日牌等之儀、委細承候様、奉得其意候、將又、拙夫早々年も罷寄申ニ付而、月牌之爲心當、染小袖壹ツ、奉進之候、戒名者、猶別紙申候、事々堯順房御口舌憑入候、可得御尊意候、恐々敬白、

閏三月十三日

景盛(花押)

高室院

參御貴報

一四三 山角直繁書狀

尙々、其以來者、御床敷そんし候、如何様之御事御座候や、朝暮無御心元候、かならずくこゝもと御用等候者、可被仰下候、以上、

伏見當番

御札再三奉拜見候、抑々其以來者、不能面上候、仍爲御音信、帶、筆被懸御意候、遠路被下候事、一入過分ニ奉存候、然ニ、伏見當番ニ候へ共、

舊學侶方一派文書

眼病氣故、不罷登候、先以其元無何事由、目出珍重候、此方無替儀候、命候内一度以面先年御懇之御禮申上度候、此口御用等御座候者、於何事も可被仰下候、如在申間敷候、隨而、物かましく候へ共、白キ御かたひら一ツ、令進上候、誠々御音信迄ニ候、猶御使口上頼入候條、不能具候、恐々謹言、

二月廿一日

直 繁(花押)

山角治部太輔
直繁

(切封ウハ書)

高室院様

御報人々御中

山角治部太輔

直 繁

一四四 峯谷政守書狀

御懇ニ御切帟被下候、乍何甚おんほう御仕合不調候て、御登被成候次ニ、拙者も此中御無沙汰申候、何様當夏中罷登可申候間、積御禮可申上候、態計ニ麻布壹端進之候、委細者、此御方可被仰候、恐々謹言、

麻布

峯谷孫右衛門
尉政守

正月廿六日

峯谷孫右衛門尉

政 守(花押)

高室院様人々御申候

一四五 蘆川綱盛書狀

追啓上、去年者、永々逗留仕、御馳走預御造作候、不淺忝畏入奉存候、委細堯順房憑入候、以上、

預貴札候、拜見過分之至奉存候、仍如被仰下候、去夏景虎様不慮之御仕合、就之、佛詣仕候處ニ、様々御取成預御懇意候、誠ニ過分難申盡奉存候、於貴院御弔申候御證文、下向之刻則御屋形様へ指上申候、隨而爰元珍貳色被懸御意候、一入畏入奉存候、次雖乏少之至候、自是木綿貳端、進覽、誠表一儀迄候、委曲令期後音之時候、恐惶謹言、

(天正八年)
卯月廿七日

(蘆川)
綱 盛(花押)

蘆川綱盛

木綿

上杉景虎ノ死
去

謹上 高室院

參貴報御同宿中

一四六 蜂屋隆長・同近勝連署書狀

蜂屋頼隆ノ卒去

(蜂屋頼隆)

出羽守不慮出來付而、遠路爲御弔、御使僧御上候、御懇志之儀候、將亦、御香錢雖御上候、惣別無御取候間、返進申候、從後室御返事可被申入候へ共、御取亂候間、從兩人相意得可申入之旨候、爰元御取靜候者、重而被仰之由候、恐々謹言、

蜂屋右京進長

蜂屋右京進

(天正十七年)
十月九日

隆 長(花押)

同 又兵衛

近 勝(花押)

蜂屋又兵衛近勝

高室院

御報

一四七 信 治 書 狀

月牌錢

京錢

北條氏規卯塔日牌錢

堯順房

信治

尊書謹拜領、抑拙者夫妻六月牌錢進上申候處、慥着山、御請取被下候、(特力)官城公、五對、墨五挺、贈賜候、難申盡奉存候、態計仁京錢三十疋進之候、誠以表一儀迄ニ候、氏規被仰合候卯塔日牌錢未進、來秋中可爲皆濟候、諸餘堯順房口上申達候條、不能具候、恐惶敬白、

三月廿八日

信 治(花押)

進(上)室院

尊報

一四八 圓 齋 書 狀

猶々、かわちさやまニ御座候御としより衆へも、其元々、我等き御いゑを罷出、めいわくいたし候由、御書候て、御下たのみ奉候、

以上、

行仙まいられ候間、一筆さし上申候、左様ニ御座候へハ、貴公様、彌々御無事御南山被成候由、目出度奉存候、爰元ニ而申上候通、拙者寺之るすいのき、如何様成共、貴公様御はからい候て可被下候、とかく寺なとにしやつきん出来致不申候様ニ、たのみ奉候、とかく此寺へ、いゑぬしかさねておき申候共、貴様御見内ニぞうりなととらせ、みきのことく御見内之物とおほしめし候て、とかく寺代之光三院と申なのうさり不申様ニ、たのみ申候、今召つかい申候るすい、事之外なるふと、き物之由承申候間、行仙なとに御語合被成候て、我等いゑ出申候様ニ、御申付候て可被下候、るすいハ、さゆわひ行仙なとも、いまたいゑ持不申候間、是ニ御申付候て可被下候哉、又ハ、貴様御見内之物ニ、とれなりともによハしき物ニ、御申付候て可被下候、我等爰元ニ而しんたいのき、いろくいたし申候も、寺之たよりニ成候ハんと存事候、一こしゆうへの御わびことも、いさいわ行仙ニかう状ニ申上候間、其

光三院

一向宗

かうりよく米きり米

元ニ而しゆび能御狀御したゝめ候て、爰元へ當年中ニ參候様ニ、たのみ奉候、光三院方へ之御かうりよくまへ被下候ハ、我等きりまへニハかまい不申候、其様す能々御かつてん候て可被下候、猶かさね而可申上候、恐惶謹言、

十一月三日

(花押)

(別筆)十一月廿四日ニ參候

(ウハ書)「進上」

高室院様

人々御中

圓齋

一四九 吉野直次書狀

猶々、御太儀ニ而、御使僧御越被成候、已上、
遠路被入御念、御狀并御札、足袋三足、扇子貳本送被下、忝奉存候、
以先其元御無事之由、珍重ニ存候、爰元加賀守殿、一段御無事ニ候間、

足袋

舊學侶方一派文書

一四七

大久保忠職唐津ニ移封サル

吉野傳右衛門直次

北條氏宗登山

北條久太郎氏宗

舊學侶方一派文書

一四八

御心易可被思召候、如仰、今度唐津へ罷越、萬事不自由成儀共、御推量可被成候、仍是式ニ候へ共、銀子拾六匁二分進上仕候、誠表御祝儀計ニ御座候、尙期後喜之刻可申上候間、不能詳候、恐惶謹言、

(慶安二年カ)

十一月廿日

吉野傳右衛門

直次(花押)

高野

高室院様

尊報

一五〇 北條氏宗書狀

猶々、此度者、御馳走御禮式申上候、以上、一書致啓上候、仍今度者致登山之處、種々御馳走、忝奉存候、來春迄爰許可罷在候條、何茂以面御禮可申述候、恐惶頓首、

北條久太郎

氏宗(花押)

十月廿八日

高室院様

御同宿中

一五一 金地院崇傳書狀案

芳札令披見候、相模國檀那出入之事、先日も如申渡候、兩門主次第一可被相究候、兩門主異見候様ニ申遣候通、先日達上聞候、其由兩門主へ折紙遣候間、可被得其意候、恐々謹言、

金地院

在判

後十月廿八日

高野山

峯坊

貴報

(端書)

慶長十九年

慈眼院あると被申狀之寫なり、

金地院狀寫

舊學侶方一派文書

一四九

相模國檀那出入

金地院崇傳

峯坊

一五二 山角直繁書狀

高福院
爐縁
炬燵

追而、高福院迄申候つる、此方さむく候て、何共折角仕候間、い
るりふち并こたつニ罷成候様ニ、くれ御切くみ候て、御越可被下候、
於此方ニ、何共番匠無候て不罷成候、以上、

寄思召御折帟、殊御樽并一桶被下候、誠御眞實之至、難筆帟盡存候、
然者、先日者御登山候處ニ、様々御馳走御申候、結句御伴衆上下共ニ御
造作、不及是非候、委細ニ御耳ニ入申候、何様自此方可申達候條、早
報非如在候、恐々謹言、

北條氏直ノ高
野登山

山角治部太輔

(天正十八年カ)
極月十六日

直 繁(花押)

山角直繁

高室院

參御返報

一五三 山角直繁書狀

五大尊

猶以、五躰尊(大カ)之儀、拙者手前ニ指置、先々得内儀候處、其元ニ被
指置、彌御祈念頼入之由、被申事候、自然彼本尊入申子細御座候
者、追而可申入由、内儀候、未女房衆も不被參候、定一兩日中ニ
可有之候、小田原迄ハ、去十日ニ御出之由申來候、以上、

廿一日之御書、廿二日酉刻參着、奉拜見候、

- 一、先日被頼入候御祈念有結願、御卷數、御札守被進候、則披露申候、
- 一、去十九日被召出、一段之御機嫌ニ候、内々可申入存候處、近日從
小田原御女房衆被參候、依之、取籠申候條、無其儀候、
- 一、出仕被申候ニ付而、定態御使者可被進歟、高福院御越幸ニ存、御
樽、肴相調、三種、二荷并濃州(北條氏規)へも三種、一荷、爲相届申候、御
心易可被思召候、

一、自分之御祈念有之候御札守被下置候、誠目出珍重ニ存候、殊更兩

北條氏直室小
田原ヨリ上ル